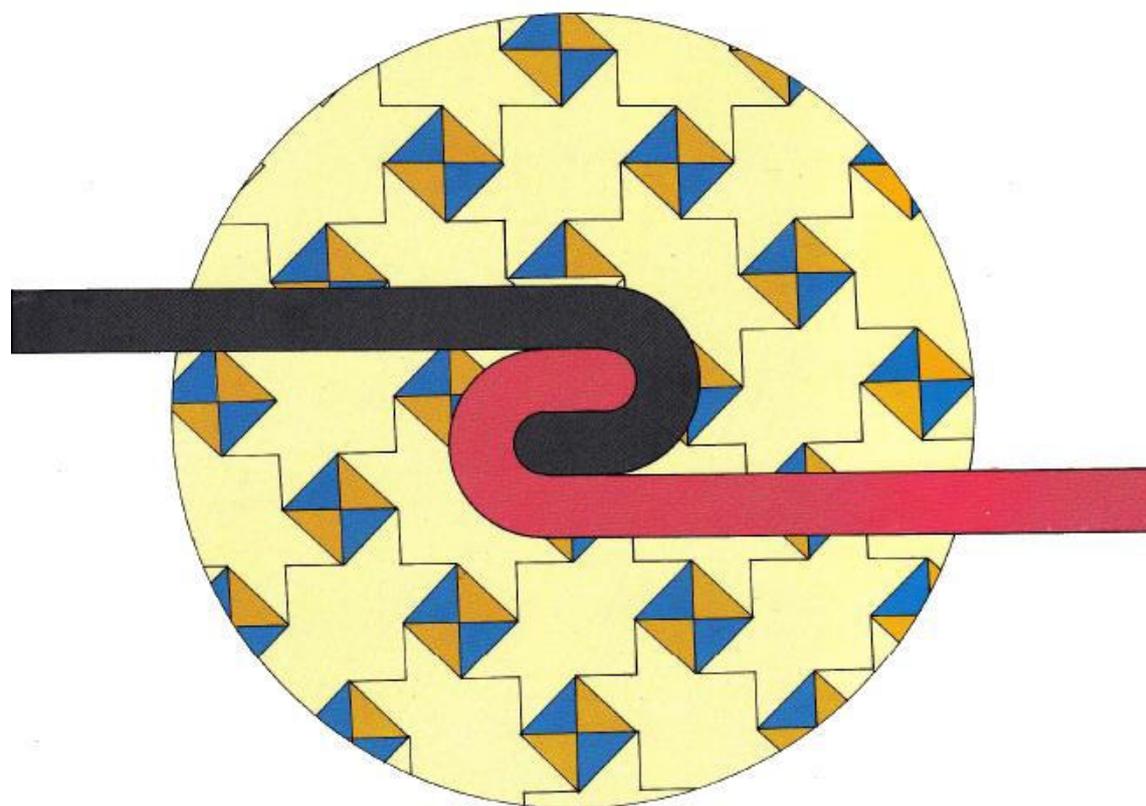


琉大化學

第39号



2024年11月

琉球大学化学同窓会

『琉大化学』 39 号目次

発刊あいさつ

琉大化学 39 号の発刊に寄せて	琉球大学化学同窓会 会長 武村 盛久 (39 期)	1
------------------	---------------------------	---

同窓生寄稿

旅の思い出	宇地原 敏夫 (17 期)	3
大学生活 4 年間とその後	畑中 和行 (39 期)	7
Time flies -光陰矢の如し-	井澤 謙一 (39 期)	10
近況報告	新垣 孝広 (39 期)	12
化学企業あるある話と近況報告	岡本 修 (39 期)	14
琉球大学化学同窓会誌に寄せて	毛利 貴広 (39 期)	18
琉大理学部化学系の最近の状況	藤村 弘行 (39 期)	20
化学から科学、そしてまた化学	大城 直雅 (39 期)	22
思い出と近況報告 ～大学入学から今までを振り返って～	高良 聡 (40 期)	24
化学科での思い出	下地 洋子 (41 期)	28
学生時代の振り返りと近況	田崎 盛也 (57 期)	30

在学生寄稿

化学系での学生生活	平田 光 (4 年次)	34
コロナ禍を終えての大学生活	佐和田 京香 (4 年次)	36
コロナ禍で始まった大学生活が終了するまで	外間 響 (4 年次)	38
大学生活の思い出	辛島 京弥 (博士前期 2 年、70 期)	42

企業広告

45

資料編

新規会員名簿	52
理工学研究科所属一覧	53
令和 6 年度 役員・各期幹事名簿	54
琉球大学化学同窓会会則	55
琉球大学化学同窓会個人情報保護方針	59
琉大逍遥歌	61

編集後記

63

琉大化学 第 39 号の発刊に寄せて

同窓会 会長 武村 盛久 (39 期)
在沖米国海兵隊基地 環境保全課

琉球大学化学同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。琉大化学 第 39 号の発刊にあたりごあいさつ申し上げます。

今年度、同窓会役員を担当する 39 期は 1988 年（昭和 63 年）入学なのですが、翌年の 1989 年 1 月に元号が平成になりましたので、昭和最後の入学生となりました。今ではさらに元号が令和となり、刻の流れを感じております。

私たちの学年は入学時に 35 名のうち県内出身者は 10 名ほどで他の学年と比べてもかなり少なく、さらに現在の県内在住者も 10 名以下となり、同窓会の役員を担当するにあたり、無事に運営できるのか心配しておりましたが、県内外から有志を集め、毎月の実行委員会でもコロナ禍において一般化したオンライン会議も利用して、県外在住者も参加していただき、どうにかここまでたどり着くことが出来ました。

また、同窓会懇親会は新型コロナ感染症感染拡大防止の観点から数年実施しておりませんでした。先輩方のご英断によって令和 4 年度の「ティーパーティー」の開催を経て、アフターコロナの前年度（令和 5 年度）には懇親会が再開され、今年度も懇親会が幅広い年代の会員の親睦と情報交換の場として開催する運びとなりました。

今回の同窓会誌においても、社会に出て様々な分野で活躍されている会員の方々から近況などをご寄稿いただきました。また現役学生（4 年次、大学院生）からも大学生活の様子などを寄稿していただきました。同窓会誌に目を通していただくことで、琉球大学化学同窓会に想いを馳せていただければ幸いです。

結びに、これまで同窓会の発足から運営に対し、ご尽力・ご協力いただいた諸先生方や先輩方、会員の皆様に、あらためて敬意を表します。また、同窓会誌にご寄稿いただいた皆様をはじめ、広告掲載にご協賛いただいた企業の皆様に感謝申し上げます。さらに、同窓会誌編集や同窓会の案内などにご協力いただきました琉大化学系事務室の皆様、役員会運営に関する引き継ぎやその後のアドバイスをいただいた 38 期の先輩方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、化学系での教育・研究活動の発展、社会に貢献できる人材の輩出および琉球大学化学同窓会が益々発展し、会員皆様のご健勝とご多幸を祈念し発刊のあいさつといたします。

同窓生寄稿

旅の思い出

宇地原 敏夫（第17期）

（化学系 元教授）

定年退職し、早や11年になる。退職後の比較的自由的な日常については、本同窓会誌第34号（2019年）に寄稿させて頂いた。それからコロナ禍による外出自粛を経て、現在は、コロナ禍前とほとんど同じような生活を送っている。昨年からは、年2回程度の個人旅行（主に国内でレンタカー利用）も再開し、自由な時間を楽しんでいる。本稿では、特に印象に残った退職後翌年から続けて出かけた2回の海外旅行について記す。

【アラスカオーロラツアー】

最初に退職1年後の2014年3月に家内と参加した大手旅行会社企画のオーロラツアーについてである。九州各地から参加した30名程のツアーで、各自で福岡空港に集まり、フェアバンクス（アラスカ）へ直行便で行く5泊6日（機内泊1泊を含む）のツアーであった。夜8時頃福岡を出発し、現地時間同日朝9時頃にフェアバンクスに到着した（時差17時間、フライト時間約6時間）。

オーロラ観測はフェアバンクス滞在の毎晩（4晩）である。夕食を済ませた後、ツアー貸与の特別な防寒服と長靴を着用し、街灯かりがない郊外のオーロラ観測地点（山小屋）まで片道約1時間をかけてバスで行く。毎晩異なる山小屋へ行き、暖房の効いた室内を出入りしながら、夜10時頃から約4時間オーロラ出現を待つことになる。オーロラ出現の有無に関わらず、夜中3時頃までには宿泊ホテルに戻ることになる。

バス移動中、現地添乗員（日本人）からオーロラ出現予測等についての話があった。「オーロラは自然現象なので、全く観測できないこともある。私もオーロラの全く観測できないツアーに幾度となく添乗したことがある。」と繰り返し説明を受ける。案の定、最初の2晩ともオーロラはほとんど観測されず、皆諦めの気持ちが芽生えていた。確かに、ツアー客のクレームに備えてか（?）、ツアーのパンフレットにもそのようなことがしっかりと小さく書かれている。



三晩目は夕方からフェアバンクス郊外の Chena 温泉リゾートにオーロラ観測に出かけた。そこで夕食後、オーロラ観測開始時間（午後10時）まで、1時間程夜間の露天温泉を楽しんだ。周辺雪の積もった大きな露天風呂で、水着着用の混浴温泉になっている。多数の男女が温泉と星空を楽しんでいる。私達夫婦も持参した水着で、氷点下の中、綺麗な星空を眺めながら温かい温泉に入るめったにない経験をした（日本の行楽地のプール感覚である）。その晩のオーロラ観測では、星空がとても綺麗なので、できるだけ長時間外で寒さに耐えて天空を仰いでいた。だが、この日も昨晚までと同様に全くオーロラは現れなかった。外は氷点下25℃程であり、リック中のポリ容器の水が凍っているのにびっくりしただけであった。

しかし、幸運にも最終晩にもものすごく綺麗な素晴らしいオーロラが観測できた。その日は山小屋到着直前から帰路につくまでの4時間、満天に黄色、赤（ピンク）を含めた緑のオーロラが観測された。最盛期にはカーテン状の綺麗で壮大なオーロラも観測された。

最終日にして見事なオーロラを観ることができ皆感動していた。後で知ったが、これが正に「オーロラ爆発」であったようである。現地添乗員もめったに観ることのない素晴らしいオーロラであったとのことで、「皆さんはとても幸運ですよ。」と、帰路のバスで嬉しそうに力説していた。

この素晴らしいオーロラを、ツアー客は、極寒の中、暖かい室内と頻繁に行き来しながら、目にいっぱい焼き付けているようであった。しかし、準備不足でほとんどの人がカメラに収めることができなかったようで残念がっていた。

私は幸いにもカメラで撮ることができた。寒冷地でオーロラを撮影することはそれなりの準備が必要であり、簡単ではないとのことは事前に調べて知っていた。ツアーに参加したいと思ったのは、勿論オーロラを直接観ることであったが、写真に撮りたいとの思いも強かった。そのようなことで、ツアー前に色々調べてその準備をしていたことが幸いした。まず、氷点下の寒冷地では、デジカメを駆動するリチウム電池の電圧降下でデジカメがうまく作動しないことがあるとのこと。それを防ぐため、私はカメラの電池収納部にカイロを貼り付けて常時暖めることにした。さらに、撮影しながらその都度写り映えを確認し、カメラの露光時間と感度を最適にする必要があった。加えて、外は-25℃程度の極寒下なので防寒具を着けても体が直ぐ冷える。暖かい山小屋に頻繁に出入りする必要がある。その都度、寒暖差によるカメラ内部およびレンズの曇りや結露を防ぐ必要がある。山小屋を出入りする際は、カメラをジッパー付きプラスチック袋に入れ、カメラの温度変化

を緩やかにする必要があった。どうにかオーロラ撮影できたのは幸運であった。

【ヨセミテドライブ旅行】

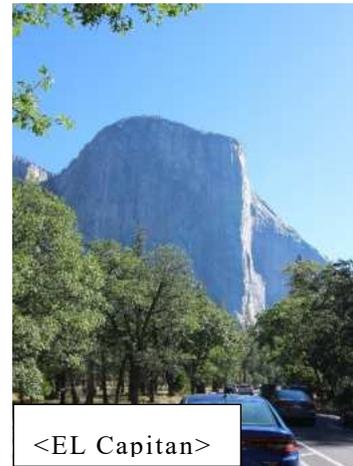
翌年6月に、ヨセミテ国立公園（米国カリフォルニア州）へドライブ旅行に行った。成田からロサンゼルスへ飛び、ロサンゼルスからレンタカーで北上し、ヨセミテ国立公園の東側を經由してヨセミテバレーへ入るコースである。行く道中の Lone pine で1泊、ヨセミテバレーで3泊、帰りはセコイア国立公園に立ち寄り、Visalia で1泊し、西ルートでロスに戻る。その後ロスで2泊して帰国する旅程である。

この旅行は、旅行社企画のツアーではない個人でのドライブ旅行である。従って、ヨセミテ国立公園に関する情報をインターネットで詳しく調べ、経路（約1,500km）を詳細に検討し、レンタカーと宿の予約をインターネットで直接行った。

ロスを起点とするルートは、行きはヨセミテの東側のタイオガ・パス・ロードを經由し、帰りはセコイア国立公園のある西側を經由するルートを設定した。ロスとヨセミテ往復の総距離は約960mile（1,536km）で、移動距離は1日平均約400kmになる。

国立公園内のヨセミテバレーと巨木セコイアが多いマリポサリ林の観光（2日）および世界一の巨木のあるセコイア国立公園の観光（1日）は共に順調であった。

ヨセミテバレーでは、入口にそびえる高さ1,000mもある巨大一枚岩 EL Capitan（ロッククライミングの聖地とのことで常時クライマーが挑戦しているようだが、肉眼では確認できない）、奥にあるヨセミテバレーを象徴するハーフドーム、ヨセミテホールに代表される多くの滝、バレー全体が眺められるトンネルビューポイント等があり、素晴らしい雄大な自然美を堪能した。バレーに隣接するマリポサ林へも車で移動し、多くのセコイアの巨木を観た。巨木



の大きさとその松毬（？）の大きさにびっくりした。ヨセミテの約 180mile (288km) 南にあるセコイア国立公園では、世界最大の生き物と認定されているセコイアの巨木（General Sharman Tree）の大きさに圧倒された。

このドライブ旅行では2度のトラブルに見舞われた。一つ目は給油トラブルで、ヨセミテ近くの無人給油所で、持っていた3種のクレジットカードがどれも使えなかった（1泊目の Lone Pine の給油所では、そのクレジットカードは普通に使えた）。他の客は普通にクレジットカード（Master, Visa）で給油している。どうしても給油する必要があり、給油中の2, 3名の欧米人に、そちらのクレジットカードで給油して貰えないかと頼んでみたが断られた。そのうち日本人でも来ないかとしばらく待っていたが現れなかった。暫くして給油に来られた欧米人夫婦に事情を話し、その方のカードで給油して貰った。割増しで現金を払ってお礼申し上げた。このご夫妻は、ほぼ同年代のフランス人で、親日家のようにであった。奥さんは東京に友達がいるようで、その人の名前を言って、知らないかと聞いてきたのにはびっくりした。日本は狭いと勘違いしていたのだろうか。とにかく、親切なご夫妻に出会えて大変助かった。

二つ目のトラブルは、帰路の成田での手荷物紛失である。手荷物回転テーブルで最後まで待つが、私の荷物が出てこない。恐らく、出発のロサンゼルス空港で、担当者が荷物にタグを付け間違えたのではないかとのこと。早速、バゲージクレーム手続きをして、手荷物なしで沖縄へ帰った。翌日、航空会社から電話が入り、私の手荷物はパリに行っており、送り返すとのこと。数日後、私の手荷物が届いたが一部破損している。バッグのカタログも同封されており、一点選び連絡するようにとのこと。連絡後、数日で新しいバッグ（ほぼ同等品）が届いた。

手荷物トラブルが行きであれば旅先で大いに困ったであろうが、帰りで今回は大きな支障はなかった。予期せぬトラブルもあるが、それでも旅は楽しいものである。



<General Sharman Tree>



<倒壊セコイア大木>



<セコイアの松毬>

大学生活 4 年間とその後

畑中 和行（第 39 期）

（宮崎県都城市役所）

【大学生活】

昭和 6 3 年 4 月、私は、宮崎県都城市の片田舎から琉球大学理学部化学科に入学した。学生寮への入寮を申し込んでおらず、初めからアパート生活となった私は、自分で時間割を作ることも知らず、大学 1 年生の前期（もちろん後期も）スカスカの時間割で 1 年を過ごした。

高校 3 年時に同クラスだった友人は北辰 B 棟に入寮し、前期から多くの授業を獲得しており、入学時にもらった様々な書類を十分確認しなかったこと、友人に相談しなかったことを後悔したのをよく覚えている。

ただ、化学科の同級生とは一緒にビーチに行ったり、バーベキューをしたりと、なかなか満喫した学生生活を送ることが出来た。

宮崎県も『南国宮崎』と言われているが、そもそも都城市は内陸にあり、山々に囲まれた盆地である。沖縄のように、白い砂浜や熱帯魚をすぐ近くで見ることの出来る環境とは全く異なる世界である。

伊計ビーチで見た海の美しさやビーチに行くまでの海中道路を同級生とドライブしたことは 30 年以上たった今でも覚えている。

平成 3 年度の大学 4 年生時は、バブルの最終年度であり、当時、就職活動に東京に行くと、沖縄からの旅費が支給される時代であった。



伊計ビーチ

企業からの内定もいただいたが、結果として私は、地元の市役所に入庁した。

学生生活は、本当に自由な時間だった。今思うと、とても真面目な学生ではなく、そのことは、多くの同級生が大きく頷いていると思う。

ただ、今の自分があるのは、琉球大学でお世話になった金城昭夫先生や宇地原敏夫先生、研究室の先輩や化学科の同級生の皆さんのおかげであることは間違いない。

【その後】

平成4年3月、大学を卒業した私は、同年4月に宮崎県都城市役所に入庁した、採用試験の面接時に、「あなたは化学科を出ているが、市役所の仕事でどう活かせるか？」との質問に対し、「下水道事業の水質検査に活かせると思います。」と答えたことを覚えている。

私の面接での回答が理由となったか、そんなことはないと思うが、入庁後、下水道部管理課に配属となった。

しかし、仕事の内容はといういわゆる「予算・決算」であり、大学で学んだことを活用することは、その後32年経過するがあまり無い状況が続いている。

ここで、私の所属する宮崎県都城市をご紹介します。

皆さんは宮崎県都城市をご存じでしょうか？平成26年度以降「肉と焼酎のふるさと都城」というキャッチフレーズで、対外的にPRやシティプロモーションを行っており、「ふるさと納税日本一」の自治体である

平成16年にナインティナインの矢部さんが番組の企画で絶賛した焼酎の「黒霧島」を製造・販売する「霧島酒造」が本社を構えており、牛・豚・鳥の畜産業が盛んであり、農業生産額は4年連続日本一の市である。

私は、平成4年4月の入庁後、下水道部管理課、企画部財政課、総務部職員課、企画部行政改革課、総合政策部総合政策課に所属してきた。

途中で、市町村合併も経験したが、ほぼ全ての部署で予算や決算、政策立案等に携わってきており、令和6年4月から、総務部長を拝命している。

化学科出身の私が、法制や人事等を所管する部を管理することとなったのである。

正直、自分が一番驚いた人事であるが、人事異動は公務員の宿命のため、精一杯努力することを常に意識して仕事に取り組んでいるところである。

昭和に入学した私たちは、平成、令和と経験する中で、時代の変化とともに求められるものも変わってきていると思う。

バブルが崩壊し、失われた30年と言われることや令和2年からのコロナウイルス感染症の世界的な感染拡大など、様々な変化を経験してきた。

現在、私の子どもたちも大学生である。これから30年後の未来がどのような時代となっているかは知る由もないが、今、大学生活を送っている皆さんが将来を担っていくことは間違いない。

なかなか実感が湧かないと思うが、今現在の置かれている状況が、自分の想像していることと違っていても、ここから先に目標をもって頑張っていくことが重要である。

私も当然、化学科に入学したときに、今の状況を想像することは出来るはずもなく、一緒に学んだ同級生も到底想像できないと思う。(本当に真面目な学生ではなかった。)

ただ、卒業後は目の前のことを一生懸命に取り組んできた。

分からないことは、先輩や周囲の人に聞くことはもちろん、様々な本で調べ仕事をしてきたところである。

時には、朝まで仕事をして、自宅に帰り、入浴・朝食後、そのまま出勤する日が何日も続いたこともある。

今、公務員はブラック職場と言われる事も多く、受験する学生も減少していることはニュースなどで見る機会が多いと思うが、公務員はとてもやりがいのある仕事だと言える。

場合によっては、苦情や苦言を呈されることもあるが、やっている業務の全てが市民の為であり、企画する政策によっては、大きな成果を挙げることもできる。

多くの学生や卒業生が、専門性を活かせる職業を選択するのだろうと考えてはいるが、今回、寄稿するに当たって、私のような卒業生もいることを知っていただき、市役所という仕事を卒業後の進路選択肢の一つとして考えてみようと思っていただけると幸いである。

最後に、学生時代の写真を添付したい。同窓会誌の中ではあるが、同級生のみんなに「ありがとう」と感謝を伝え、私の寄稿としたい。



Time flies -光陰矢の如し-

井澤 謙一 (第 39 期)

(富士シリシア化学株式会社 研究開発グループ)

胸を躍らせ故郷の宮崎から沖縄へ、一人暮らしと共に大学生活が始まったのが 37 年前の 18 歳の時でした。今年で 55 才となり、仕事では最前線の最後の年になります。

大学時代は大学生活(学業も)とアルバイトに明け暮れ、あっという間に 4 年間で過ぎてしまいましたが、今となっては、何もかもが初めての経験であった大学 4 年間より、卒業後の 37 年間の方が時間が早く流れたように感じます。卒業後、なかなか沖縄に行く事も出来ず、忙しさにかまけて同窓会への参加も出来ていない私に、同期生の武村さんからはマメに連絡を頂いており恐縮するばかりで、今回このような場を頂き感謝の意を表します。

私は大学 4 年生で理学部化学科の無機化学研究室で安里英治先生(現海洋自然科学科教授)に一から十までの研究の基礎を教えて頂きました。大環状配位子を用いた錯体化学の研究を、当時は山里崇先輩、新垣孝広さんと共に有機合成や分析を行っていました。初めての経験が多く、面白い反面、失敗する事も多々ありましたが、時間を忘れて実験していたものです。

【卒業後】 1991 年にバブルが崩壊し、1992 年 3 月に卒業した私個人はぎりぎり売り手市場の就職に間に合った口でした。まだインターネットやメールなどが普及していない時代で、普及し始めたばかりの PC を使って卒論を書いていた記憶があります。就職もデジタル化が進んでいる今とは違う環境で、就職情報誌や大学の就職募集案内等から現在の在籍会社を含め 3 社ほど会社を選定し、就職試験を受けました。その中から、無機化学をやっていたという事もあり、縁があって現在のシリカゲルの会社に就職する事となりました。

就職後は会社の留学プログラムを希望し、アメリカ-オレゴン大学で James E. Hutchison 教授のもと US 式の Chemistry への取り組み方を習うとともに 2 年間語学研修を受ける機会に恵まれました。帰国後は名古屋工業大学(名工大)に社会人学生として社から派遣して頂き、現在は Ph.D(工学)を取得し仕事にも役立っています。琉大卒業後も追加で 6 年程、勉強する機会に恵まれましたが、これらすべてが琉球大学理学部化学科での勉強・経験が礎となっています。名工大では増田秀樹教授の研究室に所属し、実際の指導は岡林博文教授に師事しました。ここで、増田先生が安里先生を御存じで、驚きを感じる

とともに「世界はつながっているんだな」と実感した事を覚えています。

その後数年間は営業として国内外を飛び回っていましたが、今は研究開発の先頭に立って、社会に貢献できる新しいものを生み出す努力をしています。ここ6年間ほど研究開発のリーダーをしています、「新しいものを生み出す」という仕事が、最も難しいと感じています。砂(珪砂)を原料に液化精製・再合成して作り出されるシリカゲルは、純度の高い、人体に無害なアモルファス無機多孔質素材です。最近では、環境に配慮したCO₂キャプチャー担体や炭酸ガスからのe-fuel合成用触媒担体として多方面から脚光を浴びています。時代に合った用途開発・素材開発を進めていますが、これからは水や空気の浄化、農産物の効率生産あたりが人類の必要とする絶対的な基本事案になってゆくと思います。素材メーカーの研究開発として、微力でもこういった分野の発展に係ってゆければ良いと考えています。社会人になって多くの事をやってきた37年間ですが、一方で11回の引っ越しを経験しました。エキスパートです！多いときは毎年引っ越しが2~3回ありましたが、平均して3.4年に1回でした。今では故郷宮崎を離れ、愛知県に骨をうずめるつもりで結婚し、子育て・マイホームローンの真最中です！

ところで、私は小さいころから魚釣りが好きで、小学校の時は祖父に連れられて、よくフナやハエ釣りに行っていました。中学・高校ではブラックバス、大学では釣りはお休みして沖縄を楽しみ、社会人となってからは、最初に磯釣りはまり、ここ数年は溪流釣りにハマっています。私の住んでいる愛知県は岐阜県・三重県に隣接し、長良川・木曾川といった大河が流れています。毎年3月初旬から9月末までの解禁期間中は、何かしらの理由をつけて足しげく源流域にイワナやアマゴつりに行っています。自然の中での休息はこれに勝るものはありません！



<長野県開田高原にて>
前列向かって右から2番目が筆者

近況報告

新垣 孝広 (第39期)

(所属：日鉄テクノロジー (株))

【はじめに】

この度は琉大化学同窓会誌『琉大化学』への寄稿の依頼を受け、果たしてどのような内容が書けるのか少々不安な面もありますが誤字脱字を含め、つたない文面が続くことをお許し願います。

50代という年齢を重ね、社会的にも個人的にも責任を負う機会の多い世代なのですが、気持ち的には大学時代の心持とそう変わらず、あっという間に時が過ぎてきた感があります。その心持の状態で私の近況を書いていきたいと思えます。

【卒業後について】

私が大学院を卒業した年は平成6年(1994年)ですが、就職するためにすぐに上京しました。私の同期は県外出身者が多く卒業後は沖縄を離れていくのは当然でしたが、私のような県内出身者が沖縄を出るのは非常に少なかったと記憶しております。就職した会社は貴金属の回収・加工業と産業廃棄物処理(以下産廃業)を行っていました。

現在はデジタル写真が主流ですが当時はまだ銀塩写真と言ってフィルムで写真を撮って現像する方法が出版界では主流でした。東京は出版関連の会社が多く現像後の廃現像液(定着液も含む)や現像後の廃フィルムが廃棄物として大量に排出されます。これらの廃棄物には銀が含まれるため、これを回収して銀を取り出しそれを売却したり加工したりするという業が成り立っていました。

廃液から銀を回収するためには廃液を化学的に処理する技術が要りますがそれを応用すると化学メーカーや研究所等から出てくる廃液の処理ができるため、全国でも数少ない廃液の中間処理という産廃業が成り立ったということになります。

この会社では大学で学んだ知識がフルで活用できたためまるで大学生活の延長のようで夜遅くなっても土日出勤も苦にならなかったです(若かったせいもありますが)。さらに東京といういろいろな意味で刺激の強い環境の中にいたのも幸いしてホームシックにならずに済みました。

【現在について】

最初に入社した会社を4年間勤めて、平成10年（1998年）に転職して現在の会社に就職しました。転職に伴い東京都から茨城県に引っ越しをして現在に至っています。冒頭の所属会社名を見てわかる通り鉄鋼メーカーの子会社に勤めております。

会社自体は鉄鋼製品の品質検査や製品機能試験がメインですが、私が所属しているのは環境測定・分析部門になります。

転職した当時は高分解能GC/MSを駆使してダイオキシン類の分析の仕事をしていました。今から20数年前のことになりますが当時は社会的にも焼却炉から高濃度のダイオキシン類が出ているということで大騒ぎしており、その渦中で仕事をしておりました。

次に平成14年（2002年）に土壤汚染対策法が施行されたことを期に土壤調査業務に移りました。これは資料調査から始まり、実際に調査対象地の土壌を採取して分析するという仕事なのですが、南は鹿児島県、北は岩手県と広範囲に及んだため仕事7割・観光気分3割というサラリーマンとしてはこの時期かなり恵まれた環境だったと思っています。

そして前任者の業務を引き継ぐということで平成24年（2012年）からは電気機器中の絶縁油のPCB分析業務に移り現在に至っております。

【最後に】

平成23年（2011年）3月11日に東日本大震災を経験しました。東北3県の被害が甚大だったため、私の住んでいる茨城県内の被害はあまり報道されていませんでしたが、私自身は震度6弱を経験し、普段の通勤ルートの道路にも津波が押し寄せた後を見たので自然災害の恐ろしさが身についてしまいました。現在でもそうですが「想定外」という言葉が通用しなくなったので台風以外に大きな自然災害が少ない沖縄の皆さんもどうぞ注意を怠らないでくださいと切に願っております。

さて「都道府県魅力度ランキング」というもの御存じでしょうか。これは事実上自分の住んでいる都道府県の知名度がどのくらいあるかをランキングにしたものだと思いますが、2023年度は沖縄県が3位なのに対し、私の住んでいる茨城県は47位の最下位です。毎回最下位争いをしているので、とうとう大井川茨城県知事は「痛くも痒くもない」と発言し、このランキングを無視しております。そうとは言え私自身はこんなに暮らしやすく自然の魅力がたくさんある茨城県が最下位なのに納得いかず日々憤慨しております。ぜひ沖縄の皆さんも茨城県へぜひお越し下さり茨城県のすばらしさを体感して頂きたいお願い申し上げます。那覇空港—茨城空港の航空便が便利です（一日1往復しかありませんが・・・）。

化学企業あるある話と近況報告

岡本 修（第39期）

【学生時代】

わたしが琉球大学に入学した 1988 年は、バブル経済の最盛期であった。アルバイト額も高く、少し頑張れば親からの仕送りに頼らず生活できた。ふた夏頑張れば、アップルコンピュータ、自家用車、高級オーディオ類等々、買い揃える事ができた。学業はさっぱりだったが、沖縄での私生活は満喫していた。そんなバブル経済も大学院を卒業する頃には、すっかり冷え込んでしまっていた。

【研究職時代】

1994 年に工業用化学薬品のメーカーに就職した。滋賀県甲賀郡にある研究所に配属された。忍者の里だ。入社前は親戚の会社でのんびり暮らしていけると高を括っていたが、考えが甘かった。親族という事で、逆に気が抜けない事を思い知らされた。

入社後 1 カ月目で担当したのは、塗料剥離剤（自動車メーカーの塗装ラインの設備メンテナンス用薬剤）の開発であった。部隊は、この頃えらい事になっていた。製品売上げの 8 割に影響のある有機溶剤が、水質汚濁防止法改正により 1994 年 2 月に排水基準が設定された為、現場で使えなくなった。自動車メーカー各社からの猶予期間は 1 年（1995 年 3 月）、上司はクローズド・システムの説明で各社を奔走していた。新入社員が実験室にぼつんと一人立ち尽くす、という状態であった。他部署の先輩方に教えを請いながら試行錯誤を繰り返すうち、偶然に特異な混合系が見つかった。ビーカーが汗をかいていた。吸熱

反応。性能も良好であった。小さなセレンディピティーであった（梅雨に感謝！）。歓喜する間もなく、製品化の申請や実機テストの準備に取り組みされた。10 月から 2 カ月間の現場での実機テストが始まった。この間、研究所に出社したのはたった 4 日。12 月に結果報告を行い採用が決まったが、2 月に製品がパレットに積まれ出荷される姿を見て、ようやく採用という実感が沸いた。その後も特許を書かされたり展示会出展や



<技術賞の賞状：金でできている為、残っていた>

技術賞への応募等々、休む間がなかった。

展示会でのエピソードが一つ。ニッチな市場という事もあり、どのブースも予想より閑散としていた。その中に大小沢山の信号機の模型を点灯させているブースがあり、強面で仏頂面のおじさんが立っていた。「キレイですね。これって何がすごいんですか？」と話しかけると仏頂面が「青色がすごいんですよ！」と笑顔でかえってきた。自発光についてあれこれ説明を受けたが、ピンとこなかった。数年後に名刺を見直して気が付くのだが、その方はノーベル物理学賞受賞者の中村修二さんであった。産業界にいと技術の分野ですごい方にお会いする事ができる。これは新鮮な驚きであった。同時に、後で恥ずかしくなるような軽はずみな言動も自粛せねば、と心に誓った。

開発業務は以後も一年目と同様のペースであった。クレームが起これば休日出勤、盆暮れ前に至っては徹夜対応（現在はそんな会社ではありません。当時の話です）。仕事がこんな感じであった分、プライベートでは思いきり発散した。夏は日本海や伊勢湾でのボディボード、琵琶湖や溪流での釣り、春秋は京都・滋賀・奈良を観光、夜は祇園、冬はスキー・スノーボードなど、多岐にわたって遊び通した。貯金はなかった。

【営業職時代】

2001年、本社神戸の営業部に異動した。部署は50代のおじさんばかりであった。担当する商品は自社合成品であるフッ素化合物、業務内容は用途開拓や新規顧客開拓であった。しかし、アイテムは物性表しかなかった。（おじさん達はどうやって営業していたのだろう？）相談すると「特許を読め」とだけ伝えられた。営業作法は「目で盗め」とも言われた。う～ん！これは自分でしっかり考えないと潰されると思った。

製品のPRポイントがかなりぼんやりしていた。これについては、競合メーカーのカタログを極秘で入手し比較した。優位性がほぼ見つからない中、動的表面張力に焦点を当てた。コーティング時のレベリング性（平滑濡れ性）に影響を及ぼす物性であった。測定機が自社にないので保有している機関を探して回り、研究部長に直談判して研究員を派遣。良好な結果が得られた。製品の知名度も恐ろしいほど低かった。問い合わせは月1回あればよいくらいであった。これについては、当時流行りであった製品のホームページを開設した。月30件以上問い合わせが来るようになった。動的表面張力データもホームページに掲載し、プレゼンにも活用した。特にレベリング機能を動画化したプレゼンは、化学系商社に好評であり、大手電子部品・材料メーカーへの紹介に引っ張りだこになった。このころ商社仲間が沢山できた。4年目でようやく軌道に乗ってきた。

新規案件の実績化は、100件やってもせいぜい3件くらいの確立であった。諦めず2年ほどプレゼン巡業を続けた結果、主に大型ディスプレイやモバイルの部材関連で広く採用されるようになってきた。尻上がりだが10年で見ると年率10%増の実績であった。ただ手放して喜んでいられなかった。採用後の生産垂直立ち上がりによる納入量は桁違いだった。ラインを止めると恐ろしい額の損害が出るのに、供給能力がいつも（優し目に見て）ぎりぎりであった。新規化学物質の場合はさらに大変で、客先の計画を見越と低生産量新規化学物質の申出から受理までの期間を想定し進める必要があった。研究所を奮起させつつ足早に進めた。この頃、ストレスはゴルフと魚釣りと出張先のご当地料理探索で発散していた。



<50ch 超えのブラックバスを釣りあげたときの雄姿 2018年春 淡路島>

一番忙しい時期だったが、この頃が一番楽しかった。面談者の殆どは客先の研究員で、開発案件が主であった為、いつも奥歯に物が挟まったような対話からのスタートだった。ここにきて特許情報は必要で、事前に読んでから面談に臨んだ。技術の人は皆、自分の技術の話を誇りに思っていて、本当は人に話したいんだろうと推測していた。上手にツボをつつくと、やはり可能な範囲であるが詳しく話して頂けた。第一線を突き進んでいる技術者の話や考え方は大変貴重であった。異業種交流会にも度々足を運んだ。次世代電池関連の会合では吉野彰（ノーベル化学賞受賞者）さんと何度もお会いした。酒の席では、エピソードなど貴重な話を頂いた。

【近況】

10年前から化学物質管理法令のサポート業務を行っている。10年前に発足した部署で、発足当初から参加させられた。営業時代、客先の海外展開をサポートするために海外の化学法令を勉強していた事は社内で知られていたが、白羽の矢が立ってしまったらしい。会社では海外展開が盛んになり、海外法令対応知識不足による通関トラブルもそれに伴い多発していた。まずは問い合わせの窓口のウェブを設置し、使用可能判定書で輸入可否を連絡するルールを設けた。対応国は20カ国以上あり、社内対応をしながら各国の化学法令セミナーを受講して中身を充実化させていった。

一番深刻だったのが、海外向け SDS（安全データシート）の対応であった。通関手続きで必要不可欠なアイテムであった。言語や法規が各国異なるのでそれぞれ準備が必要であった。外注作成では費用や納期が見合わないので、自社で作れるようシステムを導入して配布できるようにした。外注対応に比べ、年間 8 千万円程度の費用が浮いた。密かな自慢である。

原産地証明取得のサポート業務（商工会議所への対応）も引き受けてしまった。最近では、過去に携わった部署の仕事について若手社員から相談や質問が増えてきた。時代は回るというか、過去に終了した自分のテーマが社内で再度テーマ化されていた。（電池分野は大変よ！）と思いつつ、少しだけお手伝いしている。定年が見えてきているのに、仕事は相変わらず増える一方である。

末筆になりましたが、学生時代にお世話になった諸先生方、先輩方、同期・後輩の皆さん、当時は本当に大変お世話になりました。感謝しています。記載のとおり、わたしは化学の世界でしつこく生き残っています。

琉球大学化学同窓会誌に寄せて

毛利 貴広 (39 期)

大学を卒業し、沖縄を離れてから 32 年になります。

もうあと数年で定年という年齢になってしまいました。

私が沖縄にいたのは今思えばたったの 4 年間で、普段は学校とその敷地内にあった学生寮の往復というすごく地味な学生生活でしたが、今でも懐かしく思い出す大切な時間です。

4 年次には有機化学の研究室に入りました。

お昼くらいに登校して合成やらクロマトやらをやって、暗くなって夕食を食べてから帰るといふ、今考えるとそれどうなの？という感じでしたが、その分遅くまで残ったり、まずまず真面目にやっていたんじゃないかと思います（自分では）。

与儀先生はじめ先生方や同じ研究室だった院生の方々には大変お世話になりました。

卒業してからゴム製品の製造メーカーに就職しました。

最初はシューズの開発部門で、蒸れにくいウォーキングシューズや、凍った路面でも滑りにくいビジネスシューズといった様々な商品に携わらせて頂きました。

自分が関わった商品が店頭に並んでいるのを見たとき嬉しかったのを覚えています。

その後は工業用ゴム製品の開発や品質管理として従事しています。

こちらは配管のパッキンやバルブのシール材といった普段あまり目にすることのない部品で OEM 品が多く、耐久性など性能が問われる製品です。

どちらかというとい工学部的な職種で、大学時代に学んだ知識を役立てることは少ないですが、要求に合わせて作り込む難しさ・楽しさがあり、それなりに充実した毎日を過ごしています。

一度不具合の謝罪で取引先を訪問した際、そこに同じ化学科の同級生 O 君がいた時にはびっくりしました（20 年ぶりくらいの再会だったと思います）。少し世間話をした後、お詫びして帰ってきました…。

この他にも、プールなどに敷くクッションやゴムまな板、電気工事用の絶縁手袋などといったものも製造・販売しています（私も少し携わっています）。



今は実家の大分に住んでいます。

6年前、卒業以来25年ぶりに沖縄に来て学校やその周囲を巡りました。

変わったところ、変わってないところ...いろいろと感慨深いものがありました（北口のかまどや（お弁当屋）や学生寮の売店がなくなっていたのが悲しかった...）。

学校では今や教授になっている F 君や何人かの先生方にも会うことができ、また同級生にはプチ同窓会も開いてもらって、いい思い出です。

それまで九州の田舎で実家暮らしをしていた私が、親戚も知り合いも誰もいない沖縄で楽しく過ごすことができたのは、ひとえに周りの人たち、特にいつも優しく接してくれた化学科の同級生や先輩方のおかげだと思っています（あと、寮で同じユニットになった他学部の人たちも）。みんな優しかった。

他県住みとしては距離的にも頻繁に行き来は難しいですが、また来れるよう健康に留意して精進したいと思います。

2024年9月吉日

今日も35℃超えの自宅にて

琉大理学部化学系の最近の状況

藤村 弘行（第 39 期）

（琉球大学理学部海洋自然科学科化学系）

最近、東京大学が学費を値上げするというニュースを耳にした方も多いのではないでしょうか。今後その他の大学にも波及していくことが予想されています。全国的に国立大学は財源不足に悩んでいます。琉球大学では学内の駐車場を有料化する話が進んでいます。化学系では大学からの予算だけでは研究室の運営が非常に厳しく、例えば教員一人当たり、研究にどうしても必要な試薬をいくつか購入し、廃液を処理したらその年の予算を使い切ってしまうような状態が続いています。背景には少額の費用でできる基礎研究よりも高額な資金を必要とする最先端な大規模研究に予算を振り向ける、いわゆる選択と集中の施策が取られたことや、昨今では物価の上昇や電気料金の値上げなどが複合的に影響していることがあります。さらに大学では教員の人員削減も進んでいます。琉球大学では大学の根幹を支える教員よりも周辺を支える事務職員の人数のほうが多いとも言われています。化学系の教員はかつて平成が終わる少し前までは 21 名の教員が研究と学生の教育に携わっていました。現在では 17 名となり、近いうちに 16 名まで削減される予定です。一方で学生の定員や提供授業数は変わっていません。124 単位を満たして学生を卒業させなければいけません。教員の負担は増すばかりです。でも、そんなことばかり嘆いていても何の解決にもなりません。多くの先生は資金造成の申請に多大なエネルギーを注ぎ（これもさらなる教員の負担となっています）、外部資金を獲得しています。外部資金とは科学研究費助成事業（科研費）をはじめ、法人や民間企業などの助成金のことで、これらの助成金に応募し続けて頑張っています。とはいっても、このような外部資金を切れ目なく獲得し続けることには限界があります。どんなに優秀な先生でも数年間途切れることもめずらしくありません。最近では資金不足を補うためにクラウドファンディングを行う先生もいるようですが、化学系は昔ながらの方法で基礎研究や教育に資する寄付金を募っています。教員個人の努力だけではどうにもならない時にこのような資金があると大変助かります。その原資を元にして研究を進め、成果を論文として世の中に送り出し、再び外部資金の獲得に繋げることができるようになります。先生が研究や教育に熱心だと、学生も活発になります。

それが相乗効果を生み、さらに研究が進展します。また、寄付金は教員の研究費としてだけでなく、むしろ専門の学生実験に広く使用しています。化学系の専門実験は2年生の後期から分析化学実験と無機化学実験がはじまります。3年生の前期には物理化学実験と有機化学実験が行われます。これらの実験の内容は会員の皆様が学生だったころとは変わっていますが、専門分野の基礎を学ぶ上で重要なことは今も昔も変わりません。最近は安全に十分に配慮した環境下で実験を行うため、例えば分析化学実験では、学生は白衣と安全メガネはもちろん、実験中は常にニトリル製のゴム手袋をつけています（図参照）。人体への化学物質の暴露が極力ないように配慮して授業を行なっています。このような消耗品はあっという間になくなり常に補充が必要ですが、コロナ禍頃から品薄になり価額が高騰しています。授業ではなるべくその日の手袋は何度も使うように学生にお願いして実験をさせています。そんな時、やはり寄付金があれば十分な消耗品を供給して学生に安全にそして快適に実験をさせてあげることができるのです。

化学系の最近の状況と冒頭のタイトルに書いたのですが、結局お金の状況ばかりになってしまいました。もし、化学系に寄付をとお考えの会員様がいらっしゃいましたらぜひともお知らせください。クラウドファンディングのように出資者への特典があるわけではありませんが、皆様の後輩である現役の化学系学生の元気で明るい大学生活と今後の活躍を支える源となることは間違ありません。



図 専門実験の1つである分析化学実験の様子

化学から科学、そしてまた化学

大城 直雅（第 39 期）

（国立医薬品食品衛生研究所）

【学生時代】

卒業研究では教養部の森巖先生のもとで沖縄産植物の成分をテーマにしました。大量の抽出物を巨大なガラスカラムで得た画分を分取 TLC で得られた抽出液から再結晶するという、昔ながらの手法でしたが、その経験が今でも活かされています。

修士は海洋学専攻（海洋学科）比嘉辰雄先生の研究室で海洋天然物化学をテーマにしました。比嘉先生と田中淳一先生の教員 2 人態勢で、日本人学生よりも留学生が多かったため、セミナーや授業は英語メインで、意思疎通には英語を使う必要がありました。他の研究室の留学生が日本語を上達するのに対し、比嘉研では日本人の英語力が上がりました。

【沖縄県庁】

国家公務員試験に落ち、教員採用試験の願書を出し忘れるという失態のあと、沖縄県職員採用試験に合格しました。生物資源を扱う職に就きたかったのですが、県庁に合格したのは神様の指令と信じ、公務員生活をスタートしました。

新採用研修を終えて着任直後から夏頃まで残業と休日出勤の日々でした。化学を専攻したのに、配属先は微生物室で、ばい菌（その頃はそう思っていた）の事を知らないまま、食中毒の検査からのスタートでした。その年は輸入食品によるコレラや、集団赤痢、ホテルの飲食施設の配管ミスによる胃腸障害など次から次へと食中毒検査が入り、空調の無い中バーナーを焚いた検査室での業務では熱中症直前だったと後から気づかされました。

4 年後、異動で衛生動物室の海洋危険生物担当になり、少しずつ仕事を覚えようとしていた矢先、2 年連続でハブクラゲによる幼児の死亡事故が発生しました。研究職ではありましたが、事故防止対策の計画策定と予算獲得に追われました。ここでは刺症被害の疫学調査、危険生物の生態、刺毒の解明などの業務に関わりました。これまでの 8 年間は化学と少し距離がありましたが、先輩から言われた「君の専攻は **chemistry** ではなく **science** なんだ」という言葉を胸に、それでも化学を忘れずに過ごしていたように思います。

その後の 10 年間は保健化学室（現在の衛生化学班）で、食品中の化学物質や医薬品に関する業務、特に自然毒食中毒や食品添加物、食品汚染物質に関する業務を担当しました。

ここでライフワークとも言える Marine Biotoxin (海産生物毒) と出会います。海洋天然物化学を専攻していたので、天然有機化合物として馴染みがありましたが、実際のヒトに対する健康被害という視点は少なく、「君たち化学屋はモノを視ることに長けているが、モノの背景に人がいるということを知らない」と大先輩に指摘され、以降、この言葉を意識するように努めてきました。

沖縄の生物多様性は良く知られていますが、食中毒の原因も本土とは異なります。沖縄では熱帯性の魚類によるシガテラ中毒 (ciguatera poisoning) が毎年数例報告され、低頻度だが恒常的発生地域といえます。死亡例はまれなので軽く考えてましたが、患者さんとお話しする機会に触れ、考えを改めました。最も特徴的な温度感覚異常は冷たいものの感覚が電氣的な痛みを感じ、ドライアイスセンセーションともいわれます。他に搔痒や嘔吐、下痢などを伴い、回復まで数か月かかることもあります。原因物質のシガトキシン類は毒性が強く、ヒトは 70 ng 程度摂取で発症すると推定されています。そのため、原因魚に含量も 0.2 µg/kg と極微量であり、分析は挑戦的課題です。この課題には普天間高校そして生物学科の卒業生である I 教授と一緒に生物代謝や作用機構等も含めて取り組んでいます。

【国立医薬品食品衛生研究所】

40 歳を超えたころ、「公募を受けてみない？」とそそのかさされ、翌年 2012 年 10 月に国立医薬品食品衛生研究所へ転職しました。最も歴史ある国立研究機関で今年創立 150 周年を迎えます。所属は食品衛生管理部で水産食品の衛生管理が所掌業務です。主に貝毒検査に関する業務を担当していますが、フグ毒やシガテラに関する研究にも取り組んでいます。私の専門はなんだろう？と考えたとき、化学ベースの食品衛生科学なのかと思います。分析には目的があり、目的に合致した方法を選択する必要があるという、当り前のことに気づかされました。また、分析化学の答えは数値だけでなく、数値の持つ意味や価値に気づいたときに、多様な考察が広がることにも気づきました。沖縄の特色であるシガテラをテーマにしたことで海外出張を含め、多くの経験をさせてもらいました。昨年は沖縄でシガテラに関するシンポジウムを主催して、招待講演では最先端の研究成果を紹介してもらいました。化学系からも城森先生の研究室から複数のポスター発表をしてもらい、学生時代に先生方から受けた恩を少しは後輩たちに返せたのではと自負しています。また、嬉しい再会もありました。先輩の渡慶次学さんには招待講演をしていただきました。高校生による発表として 4 校が参加してくれましたが、1 校の指導教諭は後輩の G さんでした。卒業から 30 年以上経過していますが、琉大化学の同窓生と関りがあることを嬉しく思います。

思い出と近況報告 ～大学入学から今までを振り返って～

40期 高良 聡

2007年4月より琉球大学理学部海洋自然科学科化学系で無機化学分野の教育・研究を担当しています。琉大化学同窓会誌への原稿執筆という機会をいただきましたので、大学入学から現在までを振り返りつつ、今の学生さんへは昔の学生生活の様子を知ってもらい、同窓会会員の皆様に現状をお知らせしたく、ここに拙文を寄稿します。

1989年(平成元年)4月、昭和から平成へと年号が変わる初めての経験を経て、不安と期待が入り混じった春の大学入学でした。ベルリンの壁崩壊もこの年です。入学してすぐ、3年次の先輩方が主導する新入生オリエンテーションがありました。少々恐めの先輩方が開口一番「普天間出身は手を上げろ!」。手を挙げたM氏に対し「お前が年次長だ!」と、体育科系のノリで年次長が決まりました。その後、主に授業登録に関してアドバイスをいただきました。今でも変わらないと思いますが、高校と大学の違いを最初に意識するのは授業登録ではないでしょうか。現在の授業登録は全てオンラインですが、当時は体育館を使って対面で行っていました。今では想像もできませんが、まさに大学生活を左右する一大イベントでした。当時の登録の様子はここでは書けないことばかりなのでこの辺で...

1年次前期の授業で憶えているのは、M先生担当の「化学I」です(お会いするかもしれませんがイニシャルのみとします)。先輩からも「M先生の化学Iは最初の難関」とのアドバイス通りで、半分程度の学生が不可(現在のF評価)だった記憶です。大学の勉強は想像以上に大変だと思い知らされた講義でした。

2～3年次では専門教育が始まり、ほとんどの時間を理135室と別館にある実験室で過ごしていました。分析化学・無機化学・物理化学・有機化学の講義に加えて実験に追われる毎日でした。当時は今よりも実験が多く、レポートを書くのに非常に苦労しました。今とは違ってパソコンなどないので全て手書きです。レポートと試験対策の両立は本当に大変でしたが、その間に熱中していたのが草野球です。野球経験者ゼロの40期学生でチームを作り、講義の後や土日は大学のグラウンドで過ごす時間がほとんどでした。

先輩方からの強制ご指導のおかげで、化学科の学生は琉大祭にも積極的に参加していました(1&3年次と2年次に分かれて2ブース出店しました)。当時の琉大祭は現在とは全く違い、コンプライアンスの問題でここでは書けませんが、連日連夜大賑わいのお祭り

でした。そんな琉大祭の出店で得た収入は「留送会」の開催に充てられていました。お世話になった先生をお招きし、卒業する皆さんを激励する送別会です。各学年による余興もあり、縦と横の繋がりの強さが印象的でした。琉大祭と留送会は1～3年次学生全体の協力なしには成立しないイベントです。コロナ禍以降、留送会の実施はないようですが、これから再開するのでしょうか？



40期の草野球チーム（琉大グラウンド）

書きたくても書けないことがあまりにも多くありますので、4年次の研究室配属についていろいろ思い出してみたいと思います。現在も同様、どの時代も研究室配属は揉めているようで、我々40期も例外ではありませんでした。有機化学研究室は希望者が多く、自作の試験で決めたほどです。私の場合、錯体化学に興味を持っていた古舘氏と共に安里先生の研究室に生贄として捧げられました配属という結果で落ち着きました。2人は現在も錯体化学に関する研究を続けており、ここがスタート地点だったと言えるでしょう（私と古舘氏は3年次後期から安里先生主催の生物無機化学に関する勉強会に参加していました）。研究室 M2 の38期山里崇先輩、39期新垣先輩の熱心な指導のもと、配属初日から夜遅くまでの合成実験という日々がスタートしました。土曜日朝から雑誌会、まさに初めて尽くしの研究生活がスタートしました。当時の125室にはアメリカ化学会の雑誌 *Inorganic Chemistry* と *The Journal of the American Chemical Society* のバックナンバー25年分程度が本棚一面に並べられており（写真参照）、古舘氏と2人で壁一面の全冊を貪るように眺め（読んだとは言えない）、ああでもないこうでもないホワイトボードを使ってアホな学生な

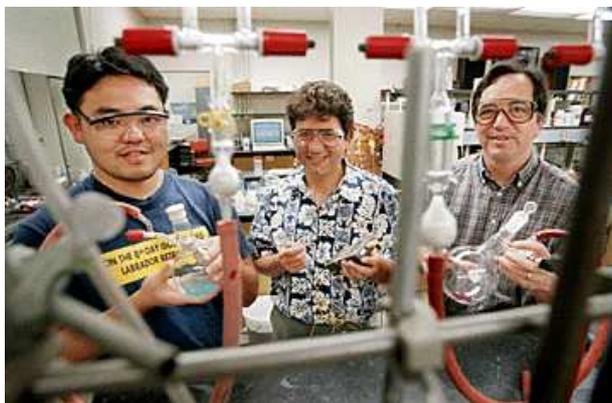
りに朝まで議論した日もありました。同期で励まし合いながら、なんとか無事に卒業することができました。今の学生さんにとっては、想像すらできない学生生活だったと思いますが、それなりに価値があった琉球大学理学部化学科での4年間でした。



桂先生と無機化学研究室にて。右側の壁には米化学会誌が並ぶ（理125室）

琉球大学での学生生活を終え、1995年4月、大阪市立大学大学院博士課程へ進学することになりました。その年は、阪神淡路大震災（1月17日）、地下鉄サリン事件（3月20日）などが立て続けに起こり、新天地への期待以上に不安の方がまさっていましたが、なんとか3年間で学位を取得することができました。恩師の磯辺清先生には頭が上がりません。非常に多くのことを学ばせていただきました。1998年4月、米国の University of Hawai'i at Mānoa（ハワイ大学マノア校）の Craig Jensen 先生の研究室に Postdoctoral Researcher として採用していただき、水素貯蔵材料の開発に従事しました。ホノルル空港に到着した瞬間オアフ島に魅了され、一生住もうと決意したのを思い出します。全く英語を話すことができずに大変な毎日を送ることになるのですが...。水素貯蔵技術に関する研究が軌道に乗り、大きな研究費を獲得した矢先、2000年4月、大阪大学の助手に採用され帰国。しかし、どうしてもハワイに帰りたいという思いから、その後、2001年9月11日の米国同時多発テロの影響などの紆余曲折を経て、ハワイ大学マノア校化学科の Assistant Professor として採用され、Takara Research Group として独立した研究室を主宰することとなりました。元ボスの Craig のもとでやっていた水素貯蔵に関する研究は封印して別のテーマを立ち上げました。着任2週間後に200名程度の学生を前に英語で授業しなければならず、講義の準備に忙殺されたのを昨日のように思い出します。膨大な研究費申請書もちろん英語です。

楽園ハワイとは裏腹にストレスにまみれた生活を送っていました。英語力を考えると渡米すべきではなかったかもしれませんが、若さゆえに何も考えていなかったからこそその行動で、今では正解だったと思うようにしています。考え過ぎずに行動するのも大事かもしれません。



Ragaiy、Craig とともに（1999 年ハワイ大学 Bilger Hall Addition にて）

その後、いろいろ悩みましたが、ハワイ大学を退職し、沖縄を離れて 12 年後の 2007 年 4 月より琉球大学へ戻って現在至ります。沖縄を離れて 30 年近く、お世話になった先輩や後輩との交流は今でも続いており、琉大化学出身者の繋がりを感じている次第です。

現在の理学部海洋自然科学科化学系の現状もお伝えします。2024 年現在、私が学生の頃にお世話になった先生は荻原先生と安里先生のお二人だけとなってしまいました。現在の学生さんは、僕らの頃と比較にならないくらいかなり真面目で勉強熱心です。一方、コロナ禍の影響もあるのでしょうか、縦のみならず横の関係も希薄なようにも感じます。

琉球大学医学部と同附属病院が西普天間地区に移転し、2025 年 1 月の開業を予定しています。千原キャンパスでも校舎の大幅改修工事が進行しています。農学部から始まった改修工事も現在は工学部で進行中であり、数年後には理学部棟の工事がスタートする予定です。改修工事期間中の仮移転先の確保、改修プランの策定など課題が山積していますが、近い将来、琉球大学の新しい姿をぜひご覧いただきたいと思います。化学系でもアクティビティの高い若い先生が着任し、活発に研究と教育をリードしています。多くの優秀な学生が入学し、世界的に活躍する若いリーダーがこの琉大化学から旅立つことを期待しています。最後に、琉大化学同窓会のますますのご発展と会員の皆様のご多幸を祈念して筆を置きます。

化学科での思い出

下地 洋子（第41期）

1990年に化学科に入学した下地洋子です。現在、宮古島市役所に勤務しており、最近では脱炭素先行地域事業に関わり、再生可能エネルギー事業の普及を中心とした地域課題解決事業を推進しています。

「いつまでも住み続けられる豊かな島、エコアイランド宮古島」を目指し、一応真面目に公務員をしています。

今回の寄稿については、卒業から約30年経過しており、記憶も曖昧な上、優等生ではない私の過去を文章にするなど、お恥ずかしいですが、寄稿者に選んでくれた同期の赤嶺成久君と今後続く化学科同窓会のため、話題を提供させていただきます。どうぞお付き合いください。

まず、大学入学で希望に満ちていた1年の18歳の夏です。新入生と指導年次との恒例の渡嘉敷島合宿時に海で溺れてしまい、男性先輩に助けられたのですが、その時の姿があまりにも無様だったので、その先輩に大笑いされ、期待したドキドキの展開はありませんでしたが、「羞恥心」を手放すと心が楽になることを知りました。ありがとうございます。岡本先輩。

また、同年、化学の単位を落とすという化学科の学生としてあるまじき事を後に長い付き合いとなる友人の宮城K子さんと共に不甲斐なさを抱えながらも後期で無事に単位を取り、乗り越えたこと。

1年次の段階で生きていく上で必要なスキルの一つである「図太さ」を習得したかもしれませぬ。(笑)

2年次からは教養から理学部棟での専門課程に移行し、実験やレポート作成に明け暮れていた・・・気がします。

が、この経験は仕事で企画立案や効果検証時に役立っています。特に現状・課題を整理し、事業評価と見直しのスキーム構築などの業務は実験方法の検討とレポート作成そのもので、行財政改革の業務や温暖化対策計画の作成などで、培った経験が活かされたと思います。

最近ではコロナ感染防止対策に放射線実習で学んだ汚染除去の理論、共洗い3回の鉄則

がコロナ初期の迅速な対応に繋がったと思います。

話は学生時代に戻り、化学科の個性豊かな先生方のご指導、先輩方のご助言のお陰で順調に進級し、4年次では、「水」を研究テーマにしたいと考えていましたので、希望の渡久山研究室に入れたことは大変うれしかった事を憶えています。

当時の渡久山研は「仏の」金城先生・宇地原先生の研究室と同部屋で、渡久山研で海外留学生の受け入れもしており、物理化学のOBが訪ねていたこともあり、夕方5時から研究室恒例のお茶会は、レーザーを用いた光触媒・環境分析・海外文化・就職情報など話題豊富だったと思います。特に島袋正志先輩の巧みな話術によるファシリと美里武明君の確実に笑いを取りに行く姿勢、強烈エピソードを保有する喜屋武裕子さんの話題提供に感心したのを憶えています。

私は話題も経験も豊富ではないので、研究室での会話から学ぶだけでしたが、今思えば、研究室での先生・先輩とのコミュニケーションや所作を、社会人としての会話や振る舞いのお手本にしていたと思います。

最近では、同学年の学友と会う機会も増えてきて、お互いに仕事・子育て・介護などの話題で盛り上がりたり、励まし合ったり、学生当時の気持ちになったりして、心の栄養になっています。

最後に私の人格・人生形成に影響を与えた化学科が進化しながらも存在し続けることを祈念いたします。

学生時代の振り返りと近況

田崎盛也（第 57 期）

（沖縄県衛生環境研究所）

57 期（2010 年 3 月卒業）の田崎です。今回同窓会誌への執筆依頼という機会をいただきましたので、簡単ではありますがこれまでのことを振り返りながら近況等を報告したいと思います。

【入学前～学部生時代】

高校生の頃は将来の何になるか考えはありませんでしたが、ぼんやりと科学を専門にした職業に就きたいくらいの考えしかありませんでした。進学のと時期が近づいてから県内で理系の専攻は琉球大学くらいであり、何を専攻にするかというところで得意で親しみのあった化学がいいなという考えから海洋自然科学科化学系の進学を決めました。学力が足りず一浪の末、化学系に何とか合格しました。入学後始めのうちは高校までの化学との内容の違いやレポートに苦しみましたが、それにも慣れ専門科目が増えてくると、幅広い分野の化学を学ぶことができ、楽しかった記憶があります。

【安里研配属】

4 年次そして修士課程は安里研配属となり、安里英治先生をはじめ、同じ無機系の研究室の高良聡先生、又吉直子先生にはお世話になりました。修士論文の研究テーマは『テトラヒドロキシベンゾキノンを経橋基とする亜鉛四核錯体の 4 電子 4 プロトンドナー挙動』であり、目的錯体の合成やキャラクタリゼーションを行うため、先輩方から実験器具の使い方や溶媒の蒸留、分析装置の使い方等、様々な技術を習い習得することができました。研究室での 3 年間は思うように研究を進められたわけではありませんが、学会参加や修論を何とかまとめたこと、セミナーや進捗報告で安里先生に厳しくも暖かい指導をいただいたことは今でも糧となっています。

【沖縄県入庁～衛研移転】

修士 2 年の時に県職員採用試験を受験し運良く合格できたため、修士課程を修了した

2012年に沖縄県に入庁し、配属されたのが衛生環境研究所で、環境科学班の大気環境グループ配属となり、今に至るまで同じ所属で務めさせていただいています。大気環境グループの業務はPM_{2.5}や光化学オキシダント等の大気汚染物質の常時監視、有害大気汚染物質調査、酸性雨調査、環境放射能調査、原子力艦寄港に伴う調査、アスベスト調査、騒音・振動・低周波音の調査など多岐にわたっています。これらに加えて、庁舎移転にかかる業務が2013年頃から始まり、施設の設計の打ち合わせや購入備品の入札、引っ越し作業など普段の業務とは全く違う業務がありました。移転業務は終わりが見えず、本当に移転は完了できるのかというときもありましたが、2017年3月に無事移転は完了しました。



南城市大里にあった旧庁舎（左）とうるま市兼箇段の現庁舎（右）

【近況報告】

現在も引き続き衛研の大気環境グループの一員として務めていますが、気づけば旧庁舎よりも現庁舎で過ごす時間が長くなり、職場でも古株になってしまいました。最近の取り組みとしてプログラミング言語 Python を利用し、大気環境に関わる多量のデータ処理や流跡線を利用した高度な解析に役立てるようなことも行っています。また、衛研に長くいたこともあり、昨年度は全国環境研協議会九州支部長表彰をいただくことができました。

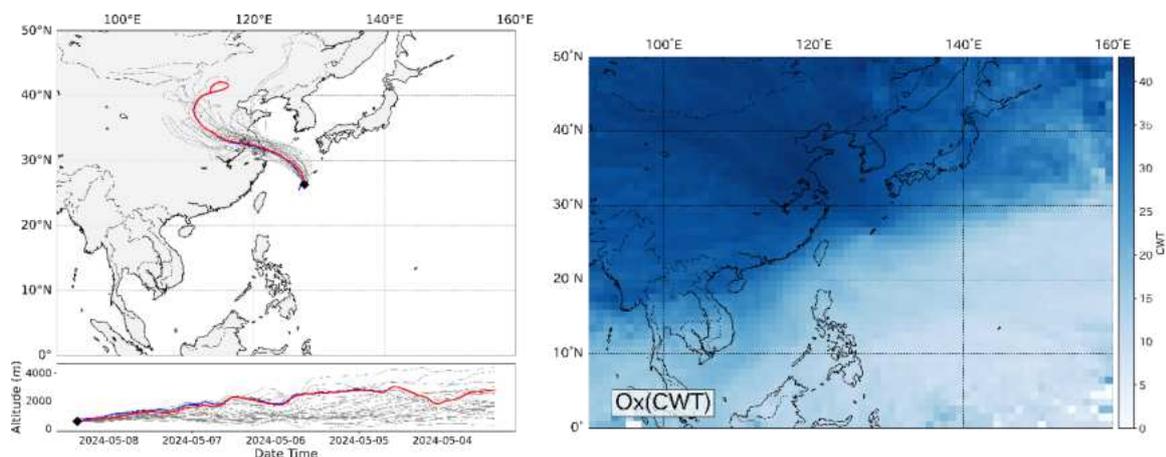
コロナ禍の間はコロナ関連の業務応援のため業務負担が増え、イベント等も中止になりましたが、現在は少しずつ以前の様子を取り戻しており、飲み会なども行われるようになっていきます。

【最後に】

衛生環境研究所は化学科・化学系出身の方が私以外にも在籍しており、県庁のなかで

は数少ない研究職であることから化学系の知識や研究経験が活かせる職場だと思います。衛研は化学系の分析化学特別実習でも実習先となっており、実習参加者が後に県職員として衛研に配属されることもあり、もし実習が県職員を目指す理由の一つになっているのなら受け入れ側としては大変嬉しい限りです。

私自身もまだまだ未熟ですので県職員として化学系の卒業生として、これからも努力していきたいと思います。



プログラミング言語 Python を利用した解析の例



全国環境研協議会九州支部長表の様子（左）と最近の職場の飲み会の様子（右）

在学生寄稿

化学系での学生生活

平田 光（4年次）

入学当初（2021年）、新型コロナウイルスが流行していたので、授業はほとんどオンラインで、実際に学校に行ったのは、年に5回ほどでした。唯一対面授業だったのが基礎ゼミと地学実験です。基礎ゼミでは、ゼミのメンバーとの交流や、学校内の散策などをしました。普段立ち入ることができないような施設に入ることができ、とても楽しかったです。また、地学実験では、自分の専門分野でない実験で不安だったのですが、恐竜や化石を調べたりなどとてもおもしろい実験を体験することができました。

二年生の後期ぐらいからコロナも落ち着き、対面での授業が増えました。特に大変だったのが化学実験です。班のメンバーと協力しながら、正確に実験を行い、レポート作成を頑張りました。中でも一番大変だった実験は「分析化学の未知試料分析」です。この実験は、個人で行う実験で、1人1個ずつ配られた試料に様々な反応を行うことによってどのような金属イオンが含まれているかを分析する実験でした。細かい操作が苦手な私にとっては、とても苦痛な実験でした。加える液体の量が多すぎたりなど小さいミスをしまくって反応がうまくいかなかった時はとても焦りましたが、TA（teaching assistant）や先生に助けをもらいながら無事実験が終わった時はとても達成感を得られることができました。



化学実験で作成した結晶

三年生になってからは、講義や実験に加え、1・3 合同研修などのイベントの実施や就職活動を主に行いました。

1・3 合同研修は、化学系の1年生と3年生が交流を深めるために開かれました。午前は、

3年生から1年生へ修学アドバイスをを行い、午後は西原のキラキラビーチでBBQを行いました。天気にも恵まれ、とても楽しい時間を過ごすことができました。



1・3 研修での様子

就職活動では、学内の公務員講座の受講に加え、民間企業の業務説明会やインターン参加をしました。中でも印象に残って

いるのが、琉球銀行のインターンです。そこでは、銀行で働くうえの基礎知識の習得や、さまざまなグループワーク、プレゼン発表、座談会、営業店実習などさまざまな体験を行うことができました。周りのインターン生のレベルの高さや積極性にとっても圧倒されましたが、この体験を通じて就活に対するモチベーションを高めることができ、今後の採用に向けて頑張りたいと思うようになりました。

3年生の夏休み明け頃から、公務員になることに決断し、学校の講義と並行しながら、公務員試験の勉強に一生懸命取り組みました。私は、化学職ではなく、行政職を目指していたため、今まで学んだことのない法律や経済を習得するのがとても大変でした。また、公務員試験は合否が出るのが民間に比べてとても遅く、周りの友人が進路が決まっていく中の勉強はとても不安と焦りが大きかったです。そして、一次試験当日は、緊張しすぎて2時間しか眠れませんでした。無事合格することができ、第一志望の官庁から内々定をいただくことができました。いままで一番達成感が大きかったかもしれません。

現在は配属された研究室で研究に向けての知識習得のため論文読みを行っています。私は玉城研でナノ粒子の研究を行っており、卒業研究のテーマは「ペリレンコロイド粒子の生成レーザー光強度依存度性」です。この研究は、バルク結晶に光を当てることにより、粒径が変わること立証するための実験です。現在行っている論文読みによって、さまざまな知識を習得し、卒業研究に向けて頑張りたいです。

この4年間を通して様々な貴重な経験することができました。学んできたことを今後にも生かし、来年からの新生活も頑張っていきたいと思います。

コロナ禍を終えての大学生生活

琉球大学理学部海洋自然科学科化学系

4年次 佐和田 京香

コロナウイルスの感染者が急増し、さまざまな活動や日常生活に対して厳しい制限が課されていた状況下で、私の大学生生活は始まりました。想像していた活気あるキャンパスライフとはかけ離れており、現実とはまったく異なるものでした。当初はほとんどの授業がオンラインで行われ、対面での交流や友達作りもままならない日々が続きました。新たな友人との出会いを期待していたものの、実際にはオンライン上でのやりとりが主流で、新たな友人関係を築くことが難しく、不安と孤独感に包まれていたことを今でも鮮明に覚えています。履修登録の方法もわからないまま、手探りの状態で進めざるを得ませんでした。そんな中、私は同じ高校から進学してきた数少ない友達と一緒に協力しながら、履修登録やオンライン授業をなんとか乗り越えることができました。それでも、なれないオンライン授業の形式に戸惑うことが多く、また、画面越しに授業を受け、実際に新しい知識が身についているのかどうか、常に不安がつきまわっていました。私は大学での化学実験に大いに期待を抱いていましたが、初めての数回を除いて対面授業はほとんどなく、実際に手を動かして行う実験の機会も限られていました。代わりに、動画を視聴して小テストやレポートを提出する日々が続き、このまま大学生生活が終わってしまうのではないかと焦燥感が募っていきました。

しかし、2年後期に入ると状況が大きく変わり、すべての授業が対面形式で再開されました。これにより、私が待ち望んでいた専門分野の実験授業がついに始まりました。初めのうちは、実験ノートの書き方や実験操作に慣れることができず、思ったように進めることができませんでした。また、レポート作成も思っていた以上に時間がかかり、頭を悩ませることがしばしばありました。それでも、同期の仲間と一緒に試行錯誤しながら協力する機会が増えたことで、少しずつ自信を持って取り組めるようになりました。さらに、先輩方の温かいサポートのおかげで、苦勞しながらも次第に実験を楽しむ余裕が生まれ、ようやく私が理想としていた大学生生活が形になってきたのを感じることができました。

3年次の夏休みには、数年ぶりに1年生と合同での研修が開催され、1・3年生が一緒に参加するイベントが実現しました。この研修では、キャンパス内での学びだけでなく、ビーチでのバーベキューやバレーボールといったアクティビティを通じて、学年の垣根を越えた交流が深まりました。私たちがこれまで、先輩方に支えられた経験があったように、今度は私たちが後輩をサポートする立場となり、そのことに大きな喜びとやりがいを感じました。このようにして、ようやくコロナ禍の制限を乗り越え、本来の大学生生活を取り戻しつつあることを実感することができました。

4年次を迎え、研究室での生活は想像していたよりも忙しくあっという間に時間が過ぎ

ていくように感じます。またこれまでの大学生活とは一線を画す充実感があります。

日々、研究を通じて新しい発見を得られることが、学びの大きな喜びとなっています。自分自身の手で実験を行い、得られたデータを分析し、そこから新たな知見を導き出すプロセスを通じて、これまでの講義や教科書などから得た知識が自分の中で具体的な形を持ち始め、実際に役立つものとして実感できる瞬間が多くなっています。

また、勉強や研究だけでなく、友人との時間も非常に大切だと改めて感じています。友人たちとの時間は、リフレッシュや新しい視点を得る貴重な機会となっています。一緒に過ごすことで、これまでの大学生活の中で築いてきた絆がさらに深まり、今後も続くであろう人間関係を育むことができていると思います。こうした友人との交流が、より充実した学生生活を送るためのエネルギー源となっています。

今回の機会に学生生活を振り返ることでコロナ禍での大学生活となり不安に感じていた入学当初には想像できなかった充実した日々を送れていることを改めて実感することができました。このような日々を送れていることに感謝し、残り半年という限られた時間の中で、これまで学んできたことを活かし、さらに深めていきたいと思っています。大学で培った知識や経験をもとに、社会に出てからも成長し続けるために、残り少ない学生生活を充実したものにしていきたいです。



写真:1・3 研修の様子

コロナ禍で始まった大学生活が終了するまで

外間 響（4年次）

【初めに】

2020年に希望を抱きながら大学生活が始まり早くも5年が経とうとしています。この文章を執筆している現在は4年次後期に当たりますので、タイトルとは違い正確には「終了しようとしているところ」ですがどうやら無事に卒業できそうなのでこのタイトルにしています。「コロナ禍」という負の側面が注目されがちな状況下で光を探しながら歩んできた5年間でした。そんな大学生活を思い出しながらこの文章に過去を綴ります。また、琉大化学同窓会誌へ寄稿できる機会を頂いたこと並びに卒業まで私を支えてくださった全ての先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

【1年次】

私は2020年4月に入学したはずですが5月頃まで授業がないというイレギュラーな状況で始まった大学生活でした。大きな講堂で授業を聞いて友達と学食で昼食をとりサークル活動に励む、という想像は現実にはならず、全ての授業がオンラインで開講し必要な外出と偶の散歩以外は常に家にいる様な生活が始まりました。

家でも楽しめるようなことを模索していた時、幸運にも私は高校時代に知り合った映画作りが好きな友人がいることを思い出しました。私は高校生の頃「映画研究部」という部活に入っていて、その全国大会で知り合った友人らです。これが私の実質的なサークル活動の始まりでした。家から出なくても誰かと一緒に何かを楽しめるのだと希望を持った初めての瞬間です。(黎地フィルム URL : <https://www.youtube.com/@ReichiFilm>)

とはいえ全国に点在する仲間と共に一つの作品を作り上げるのは難しいもので、撮影が必要になってしまう映像ではなく音だけのラジオ作品の製作に舵を切りました。高校3年間ドラマ制作をやってきましたが、この作品制作は初めての連続でした。会議、演技練習は全てビデオ会議ツールを用いて行い、実際の録音はマイクを郵便で送って各自宅で撮ってもらった後、効果音やBGMを合わせて完成させるという流れでした。

滅多にしない様な経験で多くの方々と交流を深められましたので、初めてコロナ禍でよかったと思える瞬間でした。

【2年次】

前期の授業は昨年と同様ほとんどがオンラインでしたが、唯一対面で開講された授業が「ステージスタッフ総合活動」（通称：琉大ミュージカル）でした。これは、私にとって同じ大学の学生たちと初めて一緒に取り組んだ授業でもありました。琉大ミュージカルは、授業をベースに受講生と運営スタッフである大学生が協力し、ブロードウェイミュージカルの公演を目指すものです。普通の座学とは異なり、キャストはダンスや歌の練習を、スタッフは大道具や小道具の製作、機材の準備などを行い、本格的な舞台公演を目標にしていた授業です。しかし残念ながらコロナウイルスの影響で、すべての活動が中止となってしまいました。これが、大学生になって初めて経験した挫折でした。それでも、この授業を通じて多くの人と出会い、今後も長く活動を共にする仲間と出会うことができました。

2年次後期から閉鎖された状況が徐々に変わっていきます。実験を含む一部の授業が対面での開講となりました。1年半オンラインで授業を受けることに慣れていたため、初めは少々面倒でしたが、対面での授業は「私が今大学生である」ということを実感させられます。この段階で私が一番楽しみにしていた授業である実験が始まりました。2年次後期で初めての実験レポートに取り組んだ際はかなり苦戦した思い出があります。先生自ら実験レポートの書き方を指導して頂いたこともあり無事に終えることができました。私は計画性のない人間ですから、後になって締め切りに追い詰められ友人と共に深夜までレポートに取り組んだことは良い思い出です。

【3年次】

3年次になり世間のコロナウイルスへの風当たりも弱くなってきた頃、友人らと立ち上げた映画制作団体の活動が本格化することになりました。対面での活動が増え、映像制作の案件を受けて運営資金を調達しながら、授業の合間を縫って何度か本土へ足を運ぶことになりました。数々の活動を行いました。最も印象的だったのは、後期授業が終わった後、団体結成後初の大型作品制作に挑戦し、撮影のために3週間本土に滞在したことです。そのうち2週間は青森県三戸町というのどかな街に缶詰めにされ連日撮影を行いました。かなり大変なことでしたが、2月の青森は雪が降っています。私はこの撮影中、人生で初めて雪を見ることができ、今でもその時の感動を覚えています。しかしその時期は降雪が非常に多く、感動と同時に雪の大変さを痛感することになります。撮影期間中は一軒家を丸ごと借りていて、屋根には融雪機能があったので良かったのですが問題は駐車場で

した。使っていた車2台を動かすことができないのです。屋根と違い駐車場は平面でありますから、積もった雪が重力に従って下に落ちることはありません。毎朝男性陣総出の手作業で除雪する事態になってしまいました。雪はとても美しいものですが、豪雪地帯に住むのはよく考えたいと思った撮影でした。

学業面では、4年間で最も成績が悪くなってしまいました。そもそも私の不勉強が原因でしたが、対面での活動が増えるにつれ、挑戦したいことが増えすぎて首が回らなくなり、いくつか単位を落としてしまいました。卒業できるかどうか不安になり、4年次前期に受講しなければならない授業が一気に増えてしまったため、この時期が大学生活の中で最も後悔している時期でもあります。



青森県三戸町での撮影風景(筆者は音声係)

【休学期間】

現在も原因は不明ですが、私は下垂体の病気を患い1年間休学することになりました。しかし、医師の指示に従って治療を続けた結果、1年を要すると見込んでいた治療が、半年と少しで終わることができました。私は残りの休学期間を自由に行動ができる貴重な時間だと捉え多くの地へ旅行したり、映画の撮影を行ったりしました。おそらく同年代の学生で私ほど様々な地を訪れた方は多くはいないのではないかと思います。学業は大方ストップしてしまいましたが、非常に有意義な時間を過ごせました。

また、琉大ミュージカルの仲間たちと共に、私が入学した年度の方々の卒業に向けて取り組む卒業公演に少しだけ携わる機会もありました。モラトリアムが1年延びたことで、様々な経験を積むことができましたが、私が大学生という身分に取り残されている一方で、友人たちが次のステップに進む姿を目の当たりにするのは少し辛い時期でもありました。



韓国側から撮影した北朝鮮の街並み

【4年次】

私が研究室に配属された時期です。もともとは大学院に進学するつもりでした。しかし、ある事情から4月下旬に急遽方針を変更し、就職活動に切り替えることになりました。卒業に必要な単位を取得しつつ、急に始めた就職活動は私の今後の人生を大きく左右するものであり、非常に緊張した時期でした。エントリーシートの作成も面接もしたくないような状況で4月下旬から就活を始めることは困難を極めました。なんとか第一志望の会社から内定を頂くことができました。

また、受講した授業はすべて単位を取得でき、無事に卒業できそうです。ここまで支えてくださった先生方には、心から感謝しています。

現在は卒業研究の準備を進めながら、琉大ミュージカルで出会った仲間たちと共に、卒業公演に向けて活動しています。このまま順調に進めば大学生活も残り半年となりました。2025年4月からの新生活に希望を抱きながら、大学で勉強をしたりサークルに打ち込んだり、時には1日中寝て過ごしたり、大学生である今しかできない生活を1日また1日と過ごしています。

【終わりに】

最後になりますが、ここまで私の文章を読んでいただきありがとうございます。拙い部分もあったかもしれませんがご容赦いただければ幸いです。この場を借りて再度、私を卒業まで導いていただいた先生方、共に過ごしてくれた友人たち、生活を支えてくれた家族、並びに私と関わって頂いた全ての方に感謝を申し上げます。

何もすることができなかったコロナ禍でスタートを切った大学生活でしたが、それを乗り越え沢山の方に支えられながら、辛いことも楽しいことも、この場では到底書ききれない沢山の思い出を残すことができました。

大学生活の5年間、全てまとめて貴重な良い経験になりました。おそらく人生最後の学生生活であろう残りの半年間、しっかり楽しんでから新生活を迎えようと思います。

大学生活の思い出

辛島 京弥（第70期）

（博士前期課程2年）

【思い出】

琉球大学での学生生活を終える時が近づいてきました。今回、いつもお世話になっている研究室の先生より同窓会誌への寄稿の機会をいただき、これまでの大学生活の思い出を綴らせていただきます。下手くそな文章ですが、どうかご了承ください。

私は、琉球大学理学部海洋自然科学科化学系を2016年入学、2022年卒業し、琉球大学大学院理工学研究科海洋自然専攻に2023年入学しました。現在、大学院生をしていますが、元々は大学院進学など考えていない学生でした。寿司屋をしていた祖父の影響で海の生き物に興味を持ち、海や水族館が好きだった私は、沖縄の透き通った海と美ら海水族館に惹かれて琉球大学を受験しました。よく聞く志望動機ですよ。生物系に進学したかったのですが、高校から化学を専攻していたので化学系しか受験出来ず、そのため2年次のタイミングで生物系へ転系をする予定でした。しかし、周りの環境の変化についていけず転系の機会を逃してしまいました。この事は今でも少し心残り、もし転系していたら今どうなっていたのか考える時があり、やりたい事をやれなかった事を反省しています。やりたい事はやっておくべきですね。ですが現在、分析化学の研究室でサンゴについて学ぶことが出来る藤村弘行先生の研究室にお世話になることができ、化学的観点からサンゴと海について学んでいます。海の生き物が好きな私には、沖縄の綺麗な海に生息するサンゴについて知らない事を学べるこの環境は、毎度とてもワクワクして楽しく過ごしています。なので、あの時化学系に残ったことに後悔はしていません。違う形であれ、海の生き物について学べているこの環境は、私にとってとてもプラスになっていることを嬉しく思います。

話は変わりますが、これまでの大学生活の中で、大学レベルの授業、一人暮らし、アルバイト、先輩・後輩・同期との飲み会など沢山の経験や思い出が出来ました。その中で、1番の忘れられない思い出になったことがあります。それは、1年間海外留学を経験した事です。ワーキングホリデーという現地で働きながら英語を学ぶ制度があり、そのワーキングホリデーでカナダに1年間住みました。なぜ海外留学しようと思ったのか、その

きっかけは、中学生の頃に英会話をしておりその頃から海外に興味がありました。そして、沖縄に来て外国人や異文化に触れる機会が増え、その影響でより海外への興味が湧き留学してみたいという気持ちが芽生えました。沖縄で出来た友達が海外の文化に興味がある人が多く、この制度を使って海外にチャレンジしている話をよく聞いていました。経験のある友達からの情報のおかげで、海外留学は私にとってとてもハードルの高いものから自分でもチャレンジ出来るものになりました。友達にはとても感謝しています。

いざ留学すると決めてもすぐに行けるわけもなく、大学4年の時期を休学し、約1年間地元に戻り留学資金を貯めることから始めました。ようやく留学する準備が整い日本を出発し、2020年3月のとても寒くあたり一面雪だらけの日カナダへ到着したのを今でも覚えています。不安と緊張と興奮を同時に感じ最初の宿泊場所へ向かい、無事着いた時の安心感はとても大きなものでした。ですが、これから待ちに待った海外生活が始まると意気込んでいたのも束の間、世界はコロナ禍になっていました。到着からわずか1週間で、カナダはロックダウンを発令し、外出禁止、飲食店の営業停止、マスクの着用義務化、他人との接触制限などその時の日本よりも厳しい対策がとられていました。そんな環境に周りの同じ境遇の人達は、帰れなくなることに不安を感じて帰国していきました。コロナがアジアから広まったとの情報もあり、一部の人達から嫌がらせをうけたりすることもありました。そんな厳しい状況の中でも、私はせっかくの機会を無駄にしたくなかったので残る事に決め、職と家を探しました。そして、友人から教えてもらった日本人コミュニティの助けで運良く職も家も見つける事が出来ました。私が想像していた職探しや家探しとは違いましたが、この時は生きるために必死だったのでとても助かりました。その後も、慣れない環境で苦労は続きました。日常生活で銀行口座の開設や、買い物、電車やバスでの移動などすべてが英語で、本場の英語についていけず上手くいかないこともおこったです。毎日が英会話のトレーニングでした。ですが、そのおかげもあり英会話は上達していき、会話ができるようになると生活のストレスも減り楽しく過ごせるようになっていきました。それが、大体半年過ぎたぐらいの頃でした。そこ頃には、カナダも夏になり、一時的に規制も緩和し外出が出来るようになったので、初めて外食や観光地に行きました。ちなみに、私はカナダのトロントに住んでいたのですが、トロントの季節は日本の北海道と似ているようで、夏はとても涼しく近くに大きな湖がありその湖沿いはとても気持ちのいい風が吹いていました。よく散歩したのを覚えています。そんな夏の時期に、友達と訪れたナイアガラの滝で、大迫力の自然の力に圧倒され自分の存在の小ささを感じさせられた

のは忘れもしません。本当はもっともっと色んなところに行きたかったのですが、またコロナ禍の規制が強まり帰国まで窮屈な暮らしを過ごしました。思い描いていた自由で華やかな留学生活は、コロナ禍のせいで大分劣ったものになりましたが、そんな状況でも自分にプラスになったことは多くありました。この経験を乗り越えたことで、私は自分に自信を持てるようになりました。こんな海外留学は滅多にない貴重な経験だったと思っています。諦めないで良かったです。

それから日本に戻り、大学4年次に復学し琉球大学を卒業しました。元々は、琉球大学を卒業したら地元で就職するつもりでしたが、コロナ禍での就職難もありそのまま社会に出るより、大学院に行きもっと学びたいと思い、琉球大学を卒業後に琉球大学大学院へ進学しました。大学院では、卒業研究の内容をより深掘りして研究を進めています。今は、サンプリングとサンプルの解析に追われる日々を送っています。そして私事ですが、沖縄県での就職が決まりました。これから先、社会に出た時に琉球大学の先輩方にお世話になることがあると思います。どうかその時は、ご指導・ご助言をよろしく願いいたします。最後までお読みいただきありがとうございました。



ナイアガラの滝（カナダ）

企業広告



高圧ガス製造及び容器類の再検査

(酸素・窒素・圧縮空気・液化炭酸ガス・アルゴンガス・溶解アセチレン)

電気工事業・管工事業・消防施設工事業

 株式会社 **おきさん**

本社：嘉手納町字屋良 1022 TEL(098)956-2288

泡瀬工場：沖縄市海邦町 3 -19 TEL(098)939-5980

<https://www.okisan1953.jp>





KHK

- 自然環境調査
- 自然環境の保全・再生
- 環境アセスメント
- 土壌汚染調査
- 食品検査
- 水道水質検査
- PFAS 検査
- 衛生検査

株式会社 沖縄環境保全研究所

代表取締役会長 (CEO)

平 良 辰 二

代表取締役社長 (COO)

山 川 公 男

沖縄県うるま市字州崎7番地11

TEL : (098) 934-7020 FAX : (098) 934-7021

KHK 森山商事株式会社

代表取締役会長 平良 辰二

代表取締役社長 大浜 浩志

TEL.098-835-4056



FAX.098-835-0044

取扱品：理化学機器・試薬・研究室設備等

未来をめざして信頼を得た技術で明るい未来をデザイン

沖縄電力グループ（百添会）



株式会社 沖縄エネテック

O K I N A W A E N E T E C H

〒901-2131 沖縄県浦添市牧港五丁目2番1号(沖縄電力構内)

TEL(098)879-9031 FAX(098)879-2822

URL <http://www.o-enetech.co.jp/>

[主な事業内容]

- 水質調査○海象調査○海域生物調査○陸域生物調査○大気質調査
- 騒音振動調査○環境アセスメント○臭気指数判定○油中ガス分析
- 環境計量証明事業OLCA(ライフサイクルアセスメント)



『SDGs』達成の実現に向けて、私たちは、自然との共生を
お手伝いする環境コンサルタント会社です

建設コンサルタント登録・環境計量証明事業所登録・土壌汚染調査業・測量業



株式会社 南西環境研究所

Nansei Environmental Laboratory Co., Ltd.

代表取締役 田中弘美

〒903-0105

沖縄県中頭郡西原町字東崎4-4

TEL (098) 835-8411 FAX (098) 835-8412

web: <http://www.nansei-kankyo.co.jp>

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



【主な事業内容】

- ★環境アセスメント
- ★陸生および海生動植物調査
- ★生態系調査
- ★気象・海象調査
- ★大気・騒音・振動・悪臭測定

- ★土壌汚染調査
- ★水道水検査
- ★水質・底質・産廃分析
- ★作業環境測定
- ★アスベスト検査・分析



—よりよい環境のために—

株式
会社

沖縄環境分析センター

代表取締役社長 渡久地 博之

〒901-2215 沖縄県宜野湾市真栄原3丁目7番24号
TEL (098) 897-0910 FAX (098-897-0957

業 務 内 容

大気・水質・土壌・騒音・振動・悪臭等の測定分析
水道法・ビル管理法に基づく飲料水水質検査
各種作業場の作業環境測定
環境調査・環境アセスメント
環境教育・自然観察指導員養成
自然再生事業計画・地域計画



一般財団法人沖縄県環境科学センター

〒901-2111 沖縄県浦添市字経塚 720 番地

TEL (098) 875-1941(代) FAX (098) 875-1943

<http://www.okikanka.or.jp/>

主な事業内容

- ◆ 環境分析・調査・コンサルタント ◆ 水道水等の検査
- ◆ アスベスト調査・分析 ◆ PFAS分析 ◆ 室内空気汚染(シックハウス)測定
- ◆ 食品衛生に関する検査・コンサルタント ◆ 臨床検査(検便・PCR等)
- ◆ 調査研究・普及啓発・人材育成・SDGs

- 琉球大学理学部化学科卒業生 6名
- 琉球大学理学部海洋自然科学科化学系卒業生 3名 (令和6年9月1日時点 在籍者)

資料編

新規会員名簿（2024年度）

鈴木 結	佐和田 京香	備瀬 琴葉
池田 麗	岸本 英恵	坂原 颯太
糸 美輪子	野原 大夢	木村 嘉稜
山城 侑大	牛木 ひなた	渡慶次 高史
大保 元輝	北條 就三	関 雅人
今井 雄士	西岡 啓太	新城 陽菜
平良 宇宙	紀平 笑那	牧志 卓磨
西岡 亘	島袋 陽彩	トレーロ 美海
平良 優佳	比嘉 翔	平田 光
喜友名 秀梧	森永 耀平	林 海璃
與那嶺 竜勢	矢吹 勇綸	玉城 斗環
宮城 大雅	織田 実祐希	岡田 健太
嘉陽 祈	嘉陽 圭悟	外間 響
池宮城 花南	棚原 日菜	中島 花海
清水 元輝	島袋 響	比嘉 大登

(順不同)

理工学研究科所属一覧

(M1)

饒平名 知温

外間 翔伍

前里 和香

新垣 尚熙

久田 陽紀

平良 なぎさ

諏訪 莞大

石垣 匠

宮城 葵

(M2)

玉城 悠賀

福原 加乃

藤井 冬

桂原 紅桜

比嘉 星依夢

梅田 雄飛

山城 壮

知念 勇磨

比嘉 菜々美

岸本 玲奈

大塚 千尋

辛島 京弥

有川 由祐

石川 栄作

三好 恒輝

宮城 塁

照屋 佑

(D1)

仲宗根 魁哉

(D2)

東門 大輝

八木澤 和正

源河 理子

東條 隼也

(D3)

山内 真梨江

(順不同)

学年は2024年8月31日現在

令和6年度 役員・各期幹事名簿

1. 同窓会役員

顧問	渡久山 章	琉球大学名誉教授 (13期)
会長	武村 盛久	(39期)
副会長	岡本 修	(39期)
事務局長	藤村 弘行	(39期)
会計	武村 博子	(39期)
書記	渡口 輝	(39期)
書記	小泉 宝之	(39期)
監査	名嘉 博幸	(38期)
監査	瑞慶 山功	(40期)

2. 各期幹事

1期	大城 清一	25期	山田 保	49期	伊志嶺 早苗
2期		26期	真栄里 美保	50期	屋嘉比 康彦
3期		27期	佐久本 守	51期	伊敷 直純
4期	新垣 庸一郎	28期	幸地 綾子	52期	仲真 良秀
5期	下地 康嗣	29期	荻原 和仁	53期	伊藤 道裕
6期		30期	田場 繁	54期	小谷 有司
7期	仲里 利信	31期	佐和田 正二	55期	東江 浩
8期	吉川 嘉勝	32期	川満 裕史	56期	神里 知洋
9期	伊良部 光男	33期	大湾 雅一	57期	田崎 盛也
10期		34期	宮城 喜一郎	58期	村田 正将
11期	大城 忠一	35期	安里 利光	59期	又吉 健太郎
12期	川満 尚	36期	中村 健	60期	兼次 陽大
13期	高嶺 朝勇	37期	平良 直秀	61期	上里 裕紀
14期	幸喜 稔	38期	山里 崇	62期	渡辺 公美子
15期	富永 勇	39期	武村 盛久	63期	田中 志貴子
16期	比嘉 敏勝	40期	瑞慶 山功	64期	島袋 泰博
17期	玉城 正信	41期	赤嶺 成久	65期	金城 盛人
18期	宮城 朝順	42期	川満 永公	66期	新垣 竜之介
19期	佐久眞 章	43期	宮城 健	67期	龍山 智道
20期	糸数 初枝	44期	新屋敷 博人	68期	照屋 利来
21期	伊元 幸春	45期	小島 健司	69期	金城 臣弥
22期	西浜 完治	46期	真壁 慎治	70期	(調整中)
23期	平良 辰二	47期	国場 豊	71期	知名 定悟
24期	奥間 有	48期	米須 清彦		

琉球大学化学同窓会会則

(目的)

第1条 本会の目的は、化学する心を育み、会員相互の親睦と琉球大学化学及び海洋自然科学の発展に貢献することを目的とする。

(名称及び事務局)

第2条 本会は、琉球大学化学同窓会と称し、事務局を理学部海洋自然科学科（化学系）事務室に置く。

(会員)

第3条 本会の会員は次のとおりとする。

- (1) 正会員 琉球大学化学科卒業生、海洋自然科学科卒業生、理工学研究科化学関連研究生並びに関連する大学院生
- (2) 特別会員 正会員以外の琉球大学化学科現旧職員、及び琉球大学教官で本会の主旨に賛同する者
- (3) 準会員 琉球大学化学科在学生、海洋自然科学科（化学系）在学生、及び正会員以外の同大学院生
- (4) 賛助会員 本会の主旨に賛同し、役員会で推薦した者

(事業)

第4条 本会は、前条の目的達成のために、次の事業を行う。

- (1) 会誌の発行
- (2) 会員名簿の管理
- (3) 琉球大学海洋自然科学科（化学系）教官の退職激励会及び叙勲者、受賞者の激励会
- (4) その他、本会の目的達成のために必要な事業

(会員の努め)

第5条 会員は転職、転居、改姓の都度、その旨本会事務局に通知するものとする。

(役員構成)

第6条 本会に次の役員を置く。

会長1名、副会長1名、事務局長1名、会計1名、書記2名、
琉球海洋自然科学科（化学系）幹事1名、会計監査委員2名

(役員選出)

第7条 役員は次のとおり、会員の中から選出する。

- (1) 会長、副会長は各期持ち回りとし、総会において選出する。
- (2) 事務局長、会計、書記、会計監査委員は会長が委嘱する。
- (3) 琉球大学化学幹事は海洋自然科学科（化学系）主任があたる。

(役員の仕事)

第8条 役員の仕事は次のとおりとする。

- (1) 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務を代行する。
- (3) 事務局長は、会長の指示により、会務を統率し、その事務を処理する。
- (4) 会計は、会計事務を処理する。
- (5) 書記は、会議の議事録の整理と文書事務を処理する。
- (6) 琉大幹事は、大学側を代表し、大学と同窓会との連絡調整の任にあたり会務が円滑に遂行できるようにする。
- (7) 会計監査委員は、本会の財産及び会計等の諸帳簿を監査し、その結果を総会で報告する。

(顧問の設置)

第9条 本会は、特別会員及び本会に貢献した者の中から若干名の顧問を置くことができる。顧問は会長の相談に応ずる。

(役員、顧問の任期)

第10条 役員、顧問の任期は次のとおりとする。

- (1) 役員の任期は1年とする。
- (2) 顧問の任期は2カ年とし、再任を妨げない。

(各期幹事)

第11条 各期に幹事1名を置く。各期幹事は各期で互選する。

各期幹事は各期を代表し、同窓会と同期生との連絡調整の任にあたり、会務が円滑に遂行できるようにする。

(総会)

第12条 総会は年度1回、定期総会を開催する。

2. 定期総会は次の事項を審議決定する。

- (1) 会則の改正
- (2) 役員を選出
- (3) 会務報告及び会計報告
- (4) 予算、決算の承認
- (5) その他必要な事項

3. 会長が必要と認めたときは、臨時総会を開催することができる。

4. 総会の議長は会長が務める。

(役員会)

第13条 役員会は第6条の役員で構成する。

2. 会長は必要に応じて、役員会を開催することができる。

3. 役員会の仕事は次のとおりとする。

- (1) 総会に提出する議案の審議

- (2) 事業に関する企画と運営
- (3) 正、特別、賛助会員の推薦
- (4) その他必要な事項

- 4. 役員会は、役員の数以上の出席をもって成立する。
- 5. 本会の会務執行は、役員会において、協議決定し、会員に通知する。
- 6. 役員会は、この会則に定められている事項のほか、急を要する事項について決定することができる。

(決議)

第14条 総会、役員会の決議は、出席者の過半数による。賛否同数の場合は議長の決するところによる。

(会費)

第15条 本会の会費は年間2,000円とする。但し、終身会費10,000円でこれに替えることができる。

(運営費)

第16条 本会の運営費は次の収入をもって当てる。

- (1) 会費
- (2) 寄付金
- (3) その他

(諸帳簿の備付)

第17条 本会に次の諸帳簿を備える

- (1) 会員名簿
- (2) 議事録
- (3) 会費徴収簿
- (4) 金銭出納簿
- (5) 財産目録
- (6) 備忘録 ただし、諸帳簿(2)～(6)の保存期間は5年間とする。

(会則の改正)

第18条 本会則の改正は総会の議決による。

(解散)

第19条 本会の解散は総会の議決による。

(会計年度)

第20条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終了する。

(細則決定)

第21条 本会則の施行についての細則は、役員会の承認を得て、会長が定める。

(個人情報保護方針)

第22条 琉球大学化学同窓会個人情報保護方針を別途定める。

付則

この会則は、平成3年9月14日から施行する。

付則

この会則は、平成10年11月14日から施行する。

付則

この会則は、平成18年2月25日から施行する。

付則

この会則は、平成23年1月22日から施行する。

付則

この会則は、平成29年11月4日から施行する。

付則

この会則は、令和4年11月19日から施行する。

琉球大学化学同窓会個人情報保護方針

1 基本的な方針

琉球大学化学同窓会は、平成 27 年 9 月に改正された個人情報保護法の平成 29 年 5 月 30 日付けの全面施行を受けて、同窓会員の個人情報の適切な保護及び利用の重要性に鑑み、「個人情報保護に関する基本的な考え方」について、以下の基本方針で取扱いします。

- (1) 琉球大学化学同窓会は、会員の個人情報の取り扱いに際し、個人情報保護法の精神を厳正に遵守し、個人情報管理責任者を置き、本会並びに業務委託先も含めた個人情報の適切な取り扱いに努めます。
- (2) 個人情報の収集は、本会の利用目的の範囲内において、適正な手段で行います。
- (3) 個人情報の漏洩・毀損・滅失等のないようにし、充分正確かつ安全に管理します。
- (4) 個人情報収集時に明示し、同意いただいた利用および提供の範囲を越えた個人情報の利用および提供はいたしません。
- (5) 会員から、個人情報の開示、訂正、追加または削除等の申し出があった場合は、適切な範囲で速やかに対応いたします。
- (6) 個人情報保護のための管理体制、および取り組みを継続的に見直し、その改善を図ります。

琉球大学化学同窓会は、ユーザーのプライバシー保護にあらゆる努力をしますが、裁判所や政府行政機関などからの召喚状、令状、命令などの法的手続きなどの要求に応じる際には、情報を開示することがあります。

2 会員の個人情報保護について

会員からご提供いただいた個人情報は、琉球大学化学同窓会内の安全な環境で厳重に管理、保存されます。

琉球大学化学同窓会では、会員のプライバシーを守秘するための努力を怠ることはありませんが、司法上の処理、裁判所命令、同窓会のサイト上における法律上の処理に従う必要があると判断した場合は、法に基づき個人的な情報を公表する可能性があります。

- (1) 登録していただく個人情報について
 - ① 氏名、住所、電話番号
 - ② 必要に応じ、メールアドレス、職業、勤務先（名称、電話番号）
- (2) 個人情報の利用目的について
 - ① 総会・懇親会の開催通知
 - ② 同窓会会員名簿（原簿）の編纂・加筆（同窓会名簿の発行、会員への配布は行いません。なお、必要に応じ、各期幹事へ当該期会員の個人情報を提供します。）
 - ③ その他の同窓会事業（総会資料及び会誌への役員及び各期幹事の氏名の掲載等）

(3) 個人情報の開示・訂正・削除

- ① 登録いただいた個人情報は、原則として本人に限り、開示・訂正・削除を求めることができます。
- ② 同窓会会員は、住所に変更があった場合は、情報を正確に更新するため、変更前後の情報を同窓会までお知らせください。
- ③ 具体的な方法については、記載されている連絡先にお問合せください。
- ④ 個人情報の開示・訂正・削除のご依頼があった場合、原則として本人であることが確認できた場合に限り、合法的な範囲（利用目的の達成に必要な範囲内）において速やかに対応致します。

3 個人情報の第三者への提供

同窓会は、登録いただいた個人情報を本人の承諾なく第三者に開示することはありません。ただし、次の場合は個人情報を第三者へ提供することがあります。

- ① 利用者の作為・無作為を問わず、当支部の権利や資産、および第三者などに対し損害又は不利益を与える可能性のある場合、当支部はその行為を行った会員の情報を調査し、当該第三者や警察又は関連諸機関に通知することがあります。
- ② 裁判所、検察庁、警察またはこれらに準じた権限を有する機関から、利用者からの提供情報および個人情報の開示を求められた場合、当支部はこれに応じて個人情報を開示することがあります。
- ③ 個人情報保護法第23条に基づく場合、開示できるものとします。

平成 29 年 11 月 4 日

連絡先

琉球大学化学同窓会
沖縄県西原町千原 1 番地

琉球大学理学部
海洋自然科学科（化学系）事務室
TEL (098) 895-8100
FAX (098) 895-8565
E-mail chem@w3.u-ryukyu.ac.jp

琉大逍遥歌

1952年5月22日制定
 作詞 新川 豊
 作曲 渡久地 政一

♩=100 余りおそくなく、感情をこめて

1. ふーる き み や こ に さ す ら い て て
 1. とーも の な さ け に さ よ い ふ し て て

せ い き の あ と を た ず ぬ ー れ ば
 せ み な み じゅ あ う じ と か た ら ー え ば

あ ある せ い しゅ ん の ち は さ え て は ぼ
 ふ る ほ し か げ に ゆ う きゅ う の ま こ

た く の の ぞ み ー ち か ら ー あ ー り
 た の ひ ぞ か り ー ち め ぐ む ー な ー り

琉大逍遥歌

作詞 新川 豊
 作曲 渡久地 政一

- 一、ふるき都に さすらいて
 世紀のあとを 尋ぬれば
 ああ青春の 血はさえて
 羽ばたく希望 力あり
- 二、友の情けに 酔いふして
 南十字と 語らえば
 降る星影に 悠久の
 真理の光 萌むなり
- 三、われら若人 純情に
 巷の恋は うそぶけど
 見よ東雲に 翔りゆく
 旦の生命 息吹あり

編集後記

化学科 39 期は昭和最後の入学生で、沖縄出身者が 10 名と少なく、他の学年と異なる雰囲気がありました。このような同期生が、コロナ禍で発達したオンライン会議を通じて県外在住者も含めて毎月の実行員会を経て同窓会開催にたどりつき安堵しています。

本号では 39 期を中心に、宇地原先生や後輩、在学生の方々に寄稿していただき感謝申し上げます。また、企業広告を掲載していただきました各社に厚くお礼申し上げます。

寄稿文では多くの方が、卒業後も同窓生と関りをもった経験に触れており、人の繋がりの大切さを改めて認識しました。同時に本会の活動が活発になる事が少なからず後輩たちの人生の支えになると確信いたしました。

化学系主任の藤村さんからは大学の財政事情について紹介がありました。琉大化学が時代を担う人材を輩出するために、その状況を少しでも緩和できるよう、同窓会活動にも求められているように思います。

最後に、同窓会会員の皆様のご健勝とご活躍、化学系の教育・研究活動の発展を心より祈念いたします。

琉大化学 39 号 編集担当 大城 直雅

表紙題字 森 巖 氏

表紙デザイン 上原博紀氏

『同窓会誌「琉大化学」の表紙デザインを担当させていただくことになり、たいへん光栄に思っています。同窓会誌「琉大化学」から何をイメージするか？私は、「琉大化学」が恩師や、先輩、後輩を結ぶ交遊の場を与えてくれるものであらうと思います。その交遊の場から次世への新しい知恵の結晶が生まれることを期待し、表紙をデザインしました。』（創刊号より抜粋）

琉大化学 第 39 号

発行 令和 6 年 11 月 2 日
発行者 琉球大学化学同窓会
沖縄県西原町千原一番地
琉球大学理学部 海洋自然科学科（化学系）事務室
TEL (098)895-8100
FAX (098)895-8565
印刷 有限会社 ドリーム印刷
沖縄県糸満市座波 1065
TEL (098)995-1287